
とある少女の万有引力《アトラクター》

こなつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある少女の万有引力《アトラクター》

【Nコード】

N1574P

【作者名】

こなつ

【あらすじ】

学園都市を真似てアメリカに造られた、学芸都市。

すべてが二番煎じなその都市は、学園都市の悲劇でさえも真似ようとしていた。

学芸都市の唯一の超能力者、竜守綾季は、学芸都市で行われようとしている『絶対能力進化計画』を拒否したせいで、学芸都市から追われる身に。

学芸都市から逃亡しやって来た学園都市で、少女は学園都市第一位の超能力者、一方通行に出会う。

∴とまあこんな感じでお送りします。完璧厨二病です（笑）。そして駄文です。タイトル大幅に変更です。週一更新めざします！∴とか言ってたんですが受験云々があるのでのんびり更新です。申し訳ない。

学芸都市の第一位（前書き）

学芸都市って公式：ですよ？（

「こんななんだったはず」という感覚で学芸都市は書いておりますが、この話以降は出てこないかと思われます多分！

んではプロローグ的なお話ですが、見てやってくださいませ！

学芸都市の第一位

逃げなくちゃ。

小さな足で路地裏を駆ける少女の脳は、その言葉に支配されていた。

（やだ、）

支配を潜り抜けて出てきたのはその二音。

（殺したくなんかない）

続けて浮かんだ感情とは裏腹に、少女の背後では白衣を着た男達が叫ぶ。

「逃げるな！この計画にはお前が…」

男が叫んだ言葉は英語だったが、少女の脳内でそれはすぐさま日本語に変換され、響く。

「…っ！」

少女は精一杯走るが、成人男性には敵わない。あっという間に差は縮まり、男の手が少女の肩に触れようとした。

「…！！！」

少女には、その手が自分を地獄へ引きずり込む魔の手に見えた。

「早く戻れ！早く…！？」

男の足が止まる。自分で止めたのではない。
足が地面から離れないのだ。

「クソ、お前か、アトラクター万有引力！」

引力操作と呼ばれた少女は肩を揺らし、躊躇ったあと、男に踵を返して走った。

後ろから男の怒声が聞こえるが、気にしていられない。

と、少女のポケットの携帯が震えた。

（着た！）

少女は慌てて着信に答えようと携帯を耳にあてた。

「もしもし、父様！？」

『大丈夫か！？』

電話越しのテノールは、聞こえるだけで少女に安心を与えた。

少女は強張っていた顔を緩ませ、声に答える。

「うん。ちょっと能力使っちゃったけど」

『そうか…』

テノールも安心したのか、一瞬優しげな声に変わる。そして、

『国外逃亡の手続きを済ませた。もうじき指定の場所に迎える車が来るはずだ』

「ありがと！…っ」と

少女の耳に英語が響いた。どうやら先ほど足止めした男に増援が来たらしい。少女は足を速めた。

『じゃあ、達者でな。綾季』

一瞬、『綾季』というのが何なのか忘れてしまったが、すぐに思い出す。

それは、長らく呼ばれていなかった少女の名前。アトラクター万有引力と呼ばれていたせいで忘れてしまっていた、自らの名前。

少女は、——綾季は、僅かに口元を緩ませ、

「うん」

とテノールに答えた。

自分は逃げなくてはならない。そして、彼らのしようとしていることが間違っていると証明しなくてはならない。

『学芸都市』と名付けられた全てが『学園都市』の二番煎じの牢獄は、『学園都市』の悲劇すらなぞろうとしている。綾季は緩んだ口をぎゅっと結び、やって来たリムジンに飛び乗った。

「やあ、万有引力さん」

「アナタが父様の用意した、案内人だね？」

「そのとおり」

リムジンに乗っていた白いスーツの男は、ハンドル片手にニコニコと綾季に愛想を振り撒く。綾季は「ふうん」と白けた目で男を見、釘を刺した。

「言っとくけど、裏切ったら父様に告げ口するからね。能力でアナタなんかどうにだってなるんだから」

「しませんよそんなこと。私は竜守様の忠実なる部下ですから」

竜守というのは綾季の姓だが、俺が言っている『竜守様』は綾季の父親のことだろう。

「それに、貴女は学芸都市唯一の超能力者だ」
レベルファイブ

綾季は眉をひそめ、少し黙った。

この男の言う通り、竜守綾季は学芸都市の二番煎じな超能力開発によってその能力を目覚めさせた能力者だった。

そして、そのレベルは——学芸都市で一人しか居ない、レベル5。

学芸都市が定めたものではあるが、それが示すのは綾季が学芸都市で最強だということ。

綾季は沈黙をかき消す様に「どうだか」と言いながらシートベルトを締めた。

「逃亡劇なんてワクワクしませんか？」

「何言ってるの？ちっとも！」

男は肩をすくめて笑い、アクセルを踏む。途端にリムジンのタイヤはきゅるきゅると音をたてた。

「お客様、どちらまで？」

「タクシーごっこ？良いから早くして」

「いいじゃないですか。確認です確認」

綾季は深くため息をついて、仕方がなく吐き捨てた。

「学園都市まで。学芸都市の間違いを正しに！」

学芸都市の第一位（後書き）

…ここまで、携帯で打ちました…！！
指が爆発しそうですふおおおお！！！！

とりあえず、ここまで読んでくださってありがとうございますね！

一部改正しました。

感想や文句など、お待ちしてます！

週一更新目指して…！

エージェント(前書き)

まさかの連日投稿ですよ…

熱が冷めないうちに書き溜めておいたものです。

オリキャラの設定とかも近々あげなくては…

あ、ちなみに主人公はオリキャラと一方通行…の予定。

エージェント

学園都市。

230万人程の人口を抱え、もはや一つの国家を形成していると
言っても過言ではないその都市には、一風変わった時間割カリキュラムが存在す
る。

その時間割というのは、『記憶術』、『暗記術』という名目で、
『脳の開発』を行うものだった。すなわち、『超能力開発』である。

その開発で能力を得た生徒は、その能力に応じて以下のように区
分されていた。

レベルゼロ
無能力者。
レベルワン
低能力者。
レベルツー
異能力者。
レベルスリー
強能力者。
レベルフォー
大能力者。
レベルファイブ
超能力者。

大半の生徒は無能力者だが、230万分の7の割合で、超能力者
が存在する。

さらに超能力者にだけは序列というものがあり、序列が上な程、
学園都市の頂点に近いということになっていた。

そして、今その頂点に君臨しているのが――――

アクセラレータ

一方通行の携帯が震えた。

それが示すものは、着信。一方通行は面倒ながらも携帯を開く。

白い髪に赤い眼球を持つ一方通行が居るのは第7学区のファミレスだった。『超能力開発』を進める学園都市で、七人しか居ない超能力者の彼が、何故このような場所にいるかというと――

「ミサカ、これ食べたい！ってミサカはミサカはメニューを指差してみたり！」

向かいあって座っている、打ち止め（ラストオーダー）という少女がメニューを指差し声をあげる。かつて一方通行が『絶対能力進化計画』で殺した10031人と、生残りの9968人のクロール人間を統べる『呼吸するキーボード』なる少女が、「何か食べたい」と道路で喚くからだった。

「あアそオ。じゃア勝手に頼ンでろ」

一方通行はぴよこぴよことアホ毛を揺らす打ち止めに軽くあしらいい、携帯を耳にあてる。

「なんだよ、土御門」

かけてきた相手は土御門という、良く言えば戦友、悪く言えばにやーにやー野郎だった。一方通行は八兆円の借金の返済のために学

園都市の『裏』で暗躍しているのだが、その暗躍仲間(?)が土御門なのだ。

(大方また上からの楽しいお仕事だろオヨ)

一方通行にとって『裏』のことや借金ことは打ち止めには知られたくない汚点だったので、土御門の声を大人しく待つ。

『ああ、一方通行。今何してる?』

「別に何もしてねエよ」

目の前の打ち止めは、ウェイトレスに「これくださーいってミサカはミサカは」と料理をオーダーしている。一方通行は小声で、

「用件があんならさっさと見え」

『いや、今度の仕事は急がなくてもいいんだ。ただ聞くだけ聞いて欲しくてな』

なら今じゃなくても、と脳裏で呟く一方通行。土御門はそんな一方通行に気づくことなく続ける。

『学芸都市って知ってるか?』

一方通行は目を細めた。確か、アメリカが学園都市に対抗するために建設した『二番煎じ』な都市だったはずだ。

「それがどオカしたかよ」

『そこから学園都市にエージェントってのが来ているらしいんだ』『エージェント?』

『目的は黙秘だと聞いているから知らないが、そのエージェントを

保護してくれっていう仕事が来てな』

「で？ソイツを捜せて？」

『まあそういうことだ』

一方通行は「くっだらねエ」と吐き捨てるように言った。少なくとも人捜しなど、暗部がすることではない。

『第7学区をうろうろしてるらしいから、それらしい奴を見つけたら連れてきてくれ。頼んだ。今じゃなくてもいいから』

「ハイハイ：切るぞ」

一方通行は携帯を乱暴に閉じると、大きく溜息をついた。

（人捜し、ね）

「ねえねえ、今の電話誰から？ってミサカはミサカはたずねてみるんだけど」

「ただのにゃーにゃー野郎だ」

「それって！アナタのお友達だったりするの！？ってミサカはミサカは一方通行の成長を実感してみたり！」

「ンなワケねエだろ」

ぶーっと口を尖らせる打ち止めだったが、ウェイトレスがオムライズを持ってきたことで表情は緩む。一方通行は「零すンじゃねエぞ」と本人無自覚過保護丸出しで言った。

（まアソンなすぐ見つかるモンじゃねエだろオし、今はこのクソガキも居るし——ひとまずは放っておくかア）

あんの運転手め。小さなポニーテールを揺らして、綾季は苛立っていた。

あの愛想をプライスレスに振りまく男に学園都市まで連れて来てもらって、すでに半日。この12時間何も食わず、水の入ったペットボトル片手に『第7学区』と称されるゾーンだけを延々と回り続けているのだ。綾季は半袖短パンという比較的ラフな格好の上、手ぶらではあったものの、手足の気だるさを感じずにはいられなかった。

（アイツ！！『既に学園都市の組織には連絡をとってありますので』とか『白髪で赤い目の人を訪ねればいい』とか言うだけ言って、綾季をこんな辺境の地で一人にさせるなんて！！）

確かにあの男が受けた指令は『綾季を学園都市まで運ぶこと』のみだったのかもしれないが、人道的に、常識的に女の子を見知らぬ土地に放り込むなど言語道断である。綾季は怒りに震えながら、『白髪で赤い目の人』をやみくもに探した。

（白髪で赤い目の人なんか本当に居るんだろうねあの偽善男！！）

白髪赤目など居るだけで目立ちそうなものだが、辺りを見回してもいっそうに見つからない。綾季はこの際能力を使って自分の存在を示そうかと考えたが、そんなことをしてはこの学園都市の『表』に影響が出てしまう。自分が用があるのは、学園都市の『裏』なのだ。

(————あれ?)

綾季がどうしようかと云々考えているとき、丁度一軒のファミレスの前を通りかかった。

(白い髪に、赤い目————)

綾季はそのファミレスの戸を開けた。

「美味しいーってミサカはミサカはほったが落ちそうになって
みたり!」

「そおかよ。つかその表現使う奴初めて見た」

「ええっ!!?」

スプーン片手に絶句する打ち止め。一方通行は「ンなに吃驚しな
くても」とフォローを入れる。

この少女がおかしなことを言うときは、大抵ミサカネットワーク
が関係している。ミサカネットワークとは全ミサカを繋ぐ脳波リン
クのこと、テレパシーに近いことが出来たり、記憶のバックアッ
プを取ったりも出来るのだが、打ち止めはそれを使って下位個体か
ら好き好んで必要の無い知識を得てくるのだ。

「いいから食えよ。さっさと帰ってエ」

「んなー!!? これはデートなのよ!? さっさと帰りたいなんて
禁句中の禁句かもってミサカはミサカは前言撤回を求めてみたり!
!」

「デートは初耳だし禁句ってのも初耳だア!!」

一方通行はこれ以上怒鳴り散らしては周りから白けた目で見られるのは目に見えているのでこれ以上は何も言わなかったが、舌打ちを漏らさずにはいられなかった。打ち止めは「もうっ」と可愛らしく憤慨して、スプーンを握りなおす。

そこで。

バンッ！！と、机が叩かれる音がした。

その音は紛れもなく一方通行らの机から発せられたもので、打ち止めは口を開けたままぼかん、としていた。一方通行すら「は？」と情けない声をあげる。

「やっと見つけた！！」

一方通行が顔を上げると、憎たらしいほど満面の笑みを浮かべた少女が立っていた。服装は半袖短パン。背丈は目測150センチ。およそ肩までしかないと見られる長さの髪の毛を無理やりポニーテールにしているらしく、ぴょこんと小さなテールが揺れていた。

「…待て待て、何オマエ」

「やっと見つけた！！搜したんだから！！」

話を聞かない種族だコイツ、と一方通行は判断した。一方通行は深く溜息をつく、少女に問う。

「何の用だ」

「え、アイツは会うだけでわかるって」

「誰だよアイツって」

少女は「むう」と腕を組み、思い出したように言った。

「あ、エージェントって言えばわかるって言ってた!!」

「えーじえん…?」

一方通行の肩がぴくり、と動いた。少女の言葉に首を傾げる打ち止め。暗部のこと打ち止めに知られることを危惧した一方通行は慌てて話を脱線させる。

「あー、ハイハイ、思い出しましたア。わかったからちよつと黙れ殺すぞ」

「殺すなんて物騒な」

打ち止めが一方通行と少女の目を見比べ、「ねえねえ、今度こそお友達?」と聞いてくる。一方通行は致し方なく首を縦に振った。まあ嘘ではあるが、打ち止めの売りの一つはその『素直さ』であるので、打ち止めは嬉しそうに目を輝かせた。大方「一方通行にもお友達が!?’とでも思っているのだろう。一方通行は若干その『素直さ』に感謝した。

「ねえ、アナタお名前は?」

打ち止めが足をぱたぱたと振りながら問う。少女は普通にメニューを覗きながら「ん?」と言った。

「うんとね、万有…じゃなくて、竜守綾季。綾季って呼んで?」

「アヤキね! お歳は?」

「14だよー」

どうやらこの『エージェント』と名乗った少女の名前は綾季というらしい。一方通行は先ほどの土御門からの電話を思い出した。芸都市からのエージェント。そんないかにも物騒な人物が、打ち止めより少し大きな少女だとは思うまい。一方通行は疑わずにはいられなかった。

学園都市の『裏』が送り込んだ偽者か、とも考えたが、そもそも『エージェントを保護しろ』という任務は学園都市からのものだ。それでは矛盾する。

いや、それよりも打ち止めをどうするかが先決だ。綾季が『裏』のことをうっかりばらさないよう、見張っておく必要がある。と一方通行は判断し、とりあえずこの少女の正体を追求することをやめた。

綾季は「お腹空いてるんだよー」とのん気にメニューにとらめっこしている。一方通行は彼女が手ぶらなことに気づき、聞く。

「オイ、お前金は？」

「ほえ？」

ぱちくりと瞬きをする綾季。一方通行は、新たな出費が増えるであらうことに再び溜息をついた。

最近の一方通行の短所は、中途半端な優しさである。

エージェント（後書き）

誰この優しい白い人…なんか違う気がする…。
未だに綾季のキャラクターが掴めません。

さて、次回は綾季の能力自慢でやんす。

一部改正しました。

引力操作と一方通行（1）（前書き）

バトルターンが一話分に収まりませんでした…↑
ので一気に二話投稿。

能力のお披露目とかなんとか前回のあとがきに書いたんですが、この話には無いです。すいません…。

でも次の話にはちゃんと！多分！！（

引力操作と一方通行（1）

「ぷはー、食った食ったあ！！」

膨れた腹を満足そうに撫でる綾季。一方通行は財布の中を確認する。

「ありがとね。餓死しなくて済んだよ」

「…あア、そオ」

綾季の礼を適当にあしらひ、一方通行は立ち上がった。

「もオここに用はねエよな？」

「うんっ！ってミサカはミサカは元気に返事！」

打ち止めと綾季も立ち上がって、会計に向かう一方通行を追った。

「ねえ一方通行、これからどこ行くの？ってミサカはミサカは聞いてみるんだけど」

「帰る。急用ができた」

「えええっ！？そんなあ…ってミサカはミサカは落胆してみる…」

打ち止めのアホ毛がへにやりとしおれる。一方通行はそんな打ち止めの頭をくしゃりと撫でた。

「今日はすぐ帰ってこれっからよ」

「う…約束だよってミサカはミサカは…」

「あア」

一方通行の返事に、打ち止めはにぱつと笑った。一方通行はその笑顔を確認すると、打ち止めの手を取った。

綾季はその光景を呆然と眺めている。

（口調的になんか怖そうな人だったけど…小さい子には優しい人なのかな？）

ファミレスから出た3人は、ひとまず黄泉川家に打ち止めを置いてゆくことにした。黄泉川家とは一方通行と打ち止めの現住居で、黄泉川というジャージ体育教師と、芳川という元研究者現ニートが保護者としてそこに居る。

「ねえ一方通行、結局急用ってなんなの？ってミサカはミサカは聞いてみる」

「あ？そのガキにちよつとな」

「が、ガキっ!？」

綾季がぎゃあぎゃあ抗議の声をあげるが、一方通行は気にしない。その上、さっさと歩いていってしまった。

（やっぱり優しくない!!）

空はもう暮れ始めている。打ち止めを黄泉川宅に送り、綾季と一方通行は人影の一つも見られない公園のベンチに腰掛けていた。

「―――で？」

一方通行が綾季を赤い双眼で睨む。綾季はそのドスの利いた睨みに怯んだが、屈しなかった。

「でって何さ」

「お前は結局何者なんだよ」

「エージェントって言ったじゃん！何？アナタの耳は節穴なの？」

「あんなの信じろっていう方が無理だろオが」

綾季は頬を膨らませ、「信じてないんだね」と言った。その不機嫌な声に「信じられないね」と答える一方通行。

「綾季は学芸都市から来た、正真正銘のエージェントです！」

「…証拠は」

というか、一方通行自身、エージェントの身元を確認できるくらいの詳細を握っていない。確認するのも酷な話だ。

「証拠ねえ…。ねえ、綾季が何で学芸都市から逃げてきたかわかる？」

「知るか」と素っ気無く返す一方通行だが、『逃げた』ということとは――――

（追われてるってことかア？）

この少女が何をしたというのか。綾季は一拍おいて、小さな声で言った。

「綾季はね、学芸都市が『計画』を実行しようとしているから、

逃げてきた」

「『計画』？」

一方通行が聞き返した。綾季は「やべっ」と口を手で押さえる。どうやら黙秘だったようだ。

「その『計画』がなんなのかは言えないけど、とにかくその『計画』には綾季が必要なの」

「そりゃ大層なこった」

「でも綾季はその『計画』をしたくなかった」

今までの天真爛漫な声と違った。寂しそうな声色だった。一方通行は眉をひそめる。

「拒否したんだ。でも、学芸都市は学園都市に追いつきたくて：いや、追い越したくて、『計画』を取り止めなかった。それで、綾季は『計画』に参加したくないから：」

「逃げてきたってか」

こくん、と頷く綾季。

「父様がね、学園都市の理事長：じゃないな、えーっと：まあ、理事長？みたいな人に頼めば何とかなるかもって」

「ふウン：」

その『計画』がどんなものかは知らないが、確かに学園都市を統括するアレイスターなら一つの国家相手でもどうにだってなるだろう。一方通行は納得する。

「だから綾季は、その人に頼みに来た。学芸都市の『間違い』を

正すために」

凜とした目で言った綾季は、「でもねっ」と可愛らしい笑みを浮かべて続けた。

「ぶっちゃけ綾季、その人がどこにいるかわかんないんだよねー。だからこっちの組織に協力してもらおうことにしたんだけど、アナタ知ってる？」

「まア、知らねエことはねエな」

「本当っ！？良かったー」

綾季はほっと息を吐く。

「でもよオ、学芸都市はオマエがここにいること知ってンのか？」

一方通行が問うと、綾季は「うーん」と腕を組み、「どうだろ」と曖昧な返事をした。

途端。

パンッ！！と銃声が響いて、銃弾が綾季の小さなポニーテールを掠めた。

「っ！！！！」

綾季と一方通行は立ち上がり、発砲音のした方を見た。黒いスーツの男が二人、茂みからこちらを見据えている。

「もうバレちゃったかあ…」

「てことは、アレがオマエを追う学芸都市の追っ手ってことだ

なァ？」

「まあそうだね。下がってて」

綾季の一言に、「あ？」と呆然とする一方通行。

「待て、何するつもりだオマエ」

「え？撒くだけだよ？」

「いや、だから何すン…」

再び銃声が轟く。一方通行は舌打ちをして、チョーカーのスイッチに手をかけた。

「下がってったら！杖ついてるアナタが何か出来るわけないじゃん！…」

「女子供なオマエにもおんなじことが言えるけどなァ！」

「綾季はちょっと訳が違うの！！！」

どういう意味かはわからないが、一方通行は奇遇だな、と怪しく笑った。

（俺もそこらの奴らとは訳がちげエンだよ！）

ぱちん、とスイッチを切り替える。簡単に言えばそのスイッチは、かつて事件で脳にダメージを負った一方通行が能力を使うためのもの。一方通行は引き裂かれたような笑みを浮かべる。

（ガキが意地張って怪我する前に、ちゃっちやと終わらせてやるよ）

一方通行は首をパキパキと鳴らしながら、男達を睨み返した。

「ちょ、ちょっとアナタ!!」

「うるせエな…俺にはオマエを保護する義務があんだよ」

男ががしゃん、と銃弾を装填する。綾季はびくつと肩を揺らして叫んだ。

「逃げろバカ!!」

「オマエこそなァ!」

「聞けってば!!」

男が銃口を綾季の前に立つ一方通行に向ける。綾季が「このバカ!!」と怒鳴るが、一方通行は気にしない。綾季はそんな一方通行に耐えられなくなったのか、

「この、バカああああ!!!!」

と叫んだ。

引力操作と一方通行(1) (後書き)

綾季のキャラが掴めなさすぎる件。

二分の一終了です！次へどうぞ！

引力操作と一方通行(2) (前書き)

一方通行をカッコよく書きたかったんです!! 無理だったけどな!!
んなわけでやっと能力お披露目ですよばんざーい!

引力操作と一方通行（2）

がっ！！

男の持つ銃に石が当たり、弾かれる。男は何が起こったかわからないようだ。一方通行ですら嘔然としている。

石はどこからか誰かが投げたわけではない。まるで、銃に引き付けられたように飛んできたのだ。

「っ…！」

「…オマエ、」

綾季が人差し指を銃に向けていた。

「オマエ、能力者か」

「…あーあ、黙秘だったのに」

綾季は指を戻し、やれやれと溜息をつく。一方通行は「なら言えよ」と小さく叱咤し、男に向き直った。

（さっきの能力…サイコキネシス念動力か？）

綾季の手の内を知ってもなお、下がらない一方通行。綾季はキョトンとして、

「ねえ、何で下がらないの」

「あ？…一言で言うアレだな」

さつき銃を弾かれた方でない男が、焦って小型拳銃を懷から取り出す。綾季は再び指を立てようとしたが、

「俺も、能力者だから」

という一方通行の声に、

「…は？」

綾季が呆けた声を出した瞬間、銃声が響く。

（やばい、演算が間に合わない！）

綾季は目を強く瞑った。

目を瞑っていたのは一秒にも満たない短い時間だったのに、何故かそれが長く感じた。

（だから言ったのに！）

綾季は半泣きになりながら、恐る恐る顔を上げる。

そこには撃たれて血を流す真っ白な少年がいるはずだった。

が。

一方通行は、悠然とそこに立っていた。

「…え」

血を流している様子はない。だが、あの銃声が空砲だったわけでもない。何故なら、弾は一方通行の足元にめり込んでいたからだ。男達もそうしているように、綾季は哑然とする。

「な、んで」

「ベクトル操作、って言ってわかるかア？」

どこかで聞いたことがある、と綾季は思う。そして、気づいた。

「父様が言ってた…学園都市7人しかいない超能力者の中に、ベクトル操作の能力を持つ奴がいるって…！」

綾季はやっと、目の前の超能力者の名前を聞くのを忘れていたことを思い出す。

（確か名前は、一方通行。その序列は、第一位——！）

「何だ、知ってンのか」

「アナタが学園都市第一位の能力者、一方通行…！？」

正解、と楽しそうに笑う一方通行。綾季はしばらく呆然としていたが、やがて、

「あはは…」

「あ？何笑ってんのオマエ」

「や、だって気づかなかったし」

「まァお互い様だろオ」

綾季は「うん」とだけ答えた。

二人が会話をしている間に、呆然としていた男達も正気に戻ったらしい。その片割れが叫んだ。

「おい！いいからその万有引力を渡せ！」

「アト：あア、コイツのことか」

「『計画』には学芸都市第一位の能力者が必要だと言っているだろう、万有引力！！！」

綾季がびくつと後ずさる。一方通行は男の言葉に目を細めた。

「：オイ、どオいうことだ」

「これも黙秘だったんだけどね。この際いいか」

綾季ははにかみながら言った。

「綾季は学芸都市唯一の超能力者。つまり、学芸都市最強の能力者——！」

一方通行は最初こそ疑っていたようだが、状況が状況なので信じることにしたようだ。にやりと笑んで、「オマエも第一位か」と愉快そうに言った。

「第一位同士の共闘ねエ：面白エ」

「この状況を面白がるってどうなの？」

男達が二人の言葉に驚愕する。

「第一位同士…!？」

「もしかして、一方通行か!？」

「以後お見知りおきを、ってなァ!」

一方通行が靴のつま先を小さく地面に叩く。するとドゴツ!と派手な音がして、男達の立っているところを巻き込んで地面が隆起した。一方通行の能力、ベクトル操作によるものである。一方通行達以外に誰も居ないのが幸いだった。

たまらず空へ投げ出された男達が叫ぶ暇もなく地面に叩きつけられ、呻く。

一方通行は男達が起き上がるのにしばらくかかると判断し、綾季の手をおもむろに掴むと、

「今のうちに逃げンぞ」

「え!？」

「オマエの保護が俺の仕事だ。こいつらをぶっ飛ばすことじゃねエ」

一方通行は綾季の手を引くままに、綾季は手を引かれるままに、その場から逃げ出した。

「ほあー…」

「何だよ」

「いや、車なのに家みたい」

まアキャンピングカーみてエなモンだしな、と一方通行はあしらう。

二人は綾季の追っ手を撒いて、一方通行が所属する暗部『グループ』の本拠地に来ていた。

本拠地と言っても、移動手段としても活用出来る似非キャンピングカーである。綾季は冷蔵庫があったり中心にテーブルがあったりする車内を見渡し、楽しそうに目を輝かせた。

「で？オマエ、あの能力何だよ。アトラクター万有引力とかって言ってたけどよオ」

辺りをきよきよと見渡していた綾紀に問う一方通行。綾季は一旦見回すのを中断し、

「うん。綾季の能力は『引力操作』。名前の通り、引力を操作する能力だよ」

「：あんどき、銃に石ぶつけたのは何だよ」

「アレ？んーと：ちよつと長くなるんだけど、引力っていうのは『物体を引きつけあう力』なのね？だから綾季は引きつけあわせる物体——あの場合銃と石だね——の間の引力を一時的に強くさせただけ」

ただやっただけ、という綾季だったが、一方通行は目を細めた。

（そんなの、かなり演算必要になるンじゃねエか？）

もともと引力が極端に大きい地球を媒体としてそれを強めたりする能力なら聞いたことがあるが、微弱にしか引力を持たない物体同

士の引力を操作するなど聞いたことがない。通りで『第一位』なわけだ、と一方通行は勝手に納得する。

（土御門に保護したって連絡すっか）

綾季は一通りの会話を終えて、キャンピングカー内の探索に勤しんでいる。一方通行はそんな綾季を尻目に、土御門に電話をかけた。

「オイ、保護したぞ」

『はやっ』

「いきなり学芸都市の追っ手に襲われたンだけどよオ」

『追っ手？追われてたのか？』

「…本当に何にも聞いてねエのかよ」

『だって黙秘って言うんだもん』

「もん言うな気持ち悪イ。で、これからどオすンだ」

『あー…そうだな。とりあえず今日はそこに泊めて、明日は身体^{システム}検査だ』

「何で」

『黙秘だってにゃー』

黙秘ばかりだな、と一方通行は思ったが、この際文句は言わない。文句を言おうにも自分に関係ないのだから。

一方通行は了解、とだけ返し、携帯を閉じる。

「オイ、ガキ——」

綾季はすやすやと寝息をたてていた。一方通行は知らないが、12時間も街を徘徊し、その上追っ手に襲われたのだから疲れたのも無理も無い。

「……ガキは寝るの早エな」

一方通行はその辺に落ちていた毛布を引っ掴み、綾季の上に広げた。

彼の最近の長所も、中途半端な優しさである。

引力操作と一方通行(2) (後書き)

一方通行の優しさの恩恵を受けてみたい (真顔)

一方通行の厨二ターンを書いているときが一番楽しいです。

一部改正しました。

…そろそろオリキャラ設定…

身体検査（前書き）

大幅改変です。もう改造の域です。

書き溜めしてるんですがどうにも進みません。。。。

身体検査

学芸都市の超能力者だという少女、竜守綾季を、一方通行が所属する暗部組織グループの似非キャンピングカーに保護したのが昨日。

今日彼女のためにしなくてはいけないことは身体検査システムスキャンだったかとキャンピングカーに向かいながら一方通行はぼんやりと思い出す。

（まったく…まだ目的の詳細を黙秘にしてンのかよ、あのガキは）

まあ関係ねエけど、と一方通行は流し、キャンピングカーの戸を開けた。

「おはよう一方通行」

一方通行の戦友もどき、豊かな双丘に布を巻いたサラシ少女結標が、足を組んで雑誌を読んだまま目も向けず言う。昨日あの後、キャンピングカーに戻ってきたので、綾季の世話を頼んだのだ。

「…泊まったンか」

「当たり前よ。この子保護してるんだし。昨日ちょっと起きたから、色々お話したわ」

結標が指差す先には、酔っぱらいのように眠りこける綾季が。一方通行は「そオカよ」と興味の無さそうに言って、二人の向かいに腰掛ける。

「見たんでしょ？ 一方通行」

「何を」

「引力操作」

一方通行は目を細め、

「聞いたのか」

「その返し、肯定と受け取るわよ」

結標は雑誌を読むのを止め、一方通行に向き直る。

「学芸都市の能力開発は小規模なものだし、一人でも超能力者が現れたっていうのはもう奇跡よね。こっちの身体検査では超能力者かわからないけど」

いいや、あれは十分超能力者を名乗っても良い力だった。と一方通行は思う。地球の引力を強めたりはもちろん、物体の間の引力を強めるなど並の能力者には出来ない芸当だ。

「んにゃ…」

すると、綾季が寝ぼけ眼をこすりながら起き上がった。「あー、えーと」と詰まった後、言葉を選ぶように言った。

「おはよう二人とも」

「おはよう綾季」

結標は答えたが、一方通行は黙っていた。綾季は「挨拶くらいすればいいのに」と小さく呟き、欠伸を噛み殺した。

「お腹空いた」

「パンならあるわよ、そこに」

いただきまーす、と綾季は元氣一杯にそれにかぶりつく。一方通行は打ち止めのことを思い出しながら、ぼーっとそれを見ていた。

「ねえ、身体検査ってどこでやるの？」

「常盤台の機器を借りるって言ってたから、常盤台じゃないかしら」

「ときわ…ってどこ？」

「一方通行が連れていってくれるから大丈夫」

急に名前を呼ばれた一方通行は、「は？」と情けない声を出して結標に迫る。結標は私には別な仕事があるもの、と言った。

「いや待てコラ。ンな面倒な」

「連れて行って連れて帰るだけじゃないの」

「そうだそうだった！」

多勢に無勢状態である。残りのグループのメンバー、土御門と海原にでも押し付けようかと考えたが、結標がそれを察して「あの二人も忙しいみたいだし」と一方通行の逃げ道を容赦なく遮断した。

「チッ…仕方ねエな」

一方通行は立ち上がると、綾季を見、

「早く行くぞ」

「んむう！？まだ食べてるんだけど！？」

「食いながらいい」

綾季は慌てて残りのパンを口に放ると、杖について先に出ていった一方通行を追う。

結標は小さく微笑むと、

「さて、私も行こうかしら」

綾季の目的を探りに、と愛用している上着を羽織った。

「うわ、おっきい」

一方通行と綾季、二人の目の前にあるのは学園都市で一二を争う名門校、常盤台中学だ。綾季は感嘆の声をあげ、無邪気に飛び跳ねる。

「すごいなあ、学芸都市にはこんななかったよ」

「そりゃ学芸都市は学校ってモンがあんまりねェからな」

すごいすごい、とはしゃぐ綾季を見て、何故か打ち止めのことを思い出した一方通行は、深く溜息をついた。

「一方通行」

不意に名前を呼ばれた。声の主の方を見ると、サングラスにアロハシャツ姿の土御門が気さくに手を振っていた。

「ちよーど良かった。えーと、その子は？」

「エージェント様だよ」

綾季を見てマジかよ、と呆氣にとられる土御門。

「まあ女とは聞いてたけど…まさかこんなに小さいとは」

「んな！？綾季は高一だぞ！？」

「マジかよ」

今度は一方通行も呆氣にとられた。目測150センチメートルなこの少女が高校一年生とは思えにくい。

「待て、オマエ14歳って言ってなかったか？」

「飛び級って知ってる？一方通行」

無い胸を張り、綾季は自信満々に言った。

「言ったじゃん。綾季は学芸都市第一位なのです！」

それすら知らない土御門はさらに呆けた。

綾季の目の前には、5トンほどの水がある。常盤台中学が誇る超能力者、御坂美琴の身体検査にも用いたプールだ。

「この水を浮かせるの？」

「ああ。完璧に浮き上がる速度と浮き上がった距離で見ろぜよ」

綾季は「おっけー」と腕を組む。土御門が機器を操作し、「い

いぜよー」と合図を送った。

プールサイドには綾季、一方通行、土御門の3人しかいない。土御門によると、綾季の存在は依然として黙秘であるからだ。

「いっくよー」

「あいよー」

綾季はすうっと大きく空気を吸い、静かに吐く。そして、右手の人差し指を立てた。

「ビビデバビデ、ブー！」

かけ声と一緒に、ひょいっと右手をあげる綾季。

水がちゅぷりと揺れた。そして、瞬く間に球状の水の塊が出来上がり、空に浮き上がる。

綾季の能力は引力操作。プールの床と水の間が存在する『引き合う力』を一時的に弱めることで、水を浮かせているのだ。

「すげー」

土御門がタイムを計りながら感心したように声をあげた。

当の綾季の表情は、憎たらしいほどの笑みで固定されていた。水の塊はどんどんと高度を上げていく。

「10メートル…総合評価、レベル5だぜい。おーい、綾季ー！もういいぜよー！」

「えー、まだいけるよー」

演算の傍ら、会話するほど余裕があるらしい。綾季は能力の行使を止めない。

「早く止めるにゃー！一般人にバレるぜよ！」
「すぐ終わるからー！」

相変わらず話を聞かない。一方通行は「仕方ねエな」と舌打ちをすると、

「オイコラ。アレイスターに会わせてやんねエぞ」
「ええっ!？」

「『計画』を止めるためには、アレイスターに会わなきゃなんねエンだろ？」

「うあーもう！わかった！止めますー！」

綾季が惜しそうに手を下ろした。途端に水の塊が揺れる。

「おい綾季！ゆっくり下ろし！」

土御門が忠告したところにはもう遅く。

どーん！と大袈裟なくらいの音がした。水が球に保たれないまま、元に戻った引力に従って落ちたのだ。

辺りに飛び散る5トンの水。それは当然綾季にも、一方通行にも、土御門にも襲いかかった。

綾季と一方通行は能力を駆使したので濡れるくらいで済んだのだが、土御門は水に流れてしまった。

「…オイ、何で演算を止めた」

「ご、ごめんって…」

「俺は別に良いけどよオ、…アイツは」

「綾季いいいいいい!!!!!!」

土御門の怒号が轟いた。

身体検査（後書き）

…結標の名前って『あわき』ですよ。やべ、似てる…。

次はあの人の登場だよ万歳！

御坂美琴（前書き）

御坂は出したかったんだけどいつ出そうか迷ってたのでさっさと出しちゃえ！ってことで。

…それにしてもアニメ御坂はデレデレどすなあ…

御坂美琴

「何で今日に限って、校内立ち入り禁止なのよ！」

御坂美琴は、埃の一つも落ちていない常盤台中学の廊下を走っていた。

（まあその今日に限って忘れ物したのは私だけどさ…）

御坂の足音以外何も聞こえない常盤台中学の廊下。静寂が御坂をより焦らせる。

（忘れたのが携帯っていうのも痛いわよね…）

その携帯電話に、空間移動の能力を持つ後輩の白井黒子にこの立ち入り禁止の校内にレポートしてもらってまで取りに来る価値があるのか、と聞かれれば、答えはイエスだ。何せ御坂の携帯には、御坂の思い人のアドレスが登録されているのだから。

（まあ、メールする勇氣はないけど！）

そんな自分に少々苛立ちを覚えたが、それでも携帯が無いというのは不便極まりないし、十分取りにいく理由にはなる。

（それにしても、先生達も立ち入り禁止なのかしら。見当たらないけど）

まあ会わないに越したことないし、と御坂は忘れ物があるであろう教室へ向かう。

その瞬間。

ドーン！と、大袈裟なくらい音がした。

(な、何!?)

御坂は音がした方——すなわち、プールの方角に向いた窓を覗く。

「綾季いいいいいいいい！！！！」

絶叫が響いた。

「ごめんって！」

「ごめんて済むかあああ！」

プールサイドには、御坂と同じ年くらいの少女と、杖をついた真っ白な少年。それと、先ほど叫んだアロハシャツの男がいた。

白い少年の方は、御坂に見覚えがある。

（あの白いの、一方通行……！？）

間違いない。何故杖をついているのかはわからないが、白髪に赤い双眼で思い当たる人物など一人しかいない。

一方通行。

かつて御坂のDNAマップをもとに作られた妹達を、無惨にも
シスターズ
一万人以上殺した張本人。

（もしかして今の音、一方通行が！？）

今すぐ窓から飛び降りて胸ぐらを掴んでやろうか、と考えたが、
それは携帯を救出してからだ、と自粛する。

（丁度いいわ。むしろくしゃしてるし、ぶっ飛ばしてやる！）

午前10時。びしょ濡れになった綾季と一方通行の二人は、二人
よりもびしょびしょになった土御門と別れ、人目につかない道を歩
いてキャンピングカーに戻ろうとしていた。

何故人目につかない道かというと、びしょびしょになった二人組
が普通に人通りを歩けば、風紀委員やら警備員が寄って集って二人
を「何かあったのか」と心配してくるからだ。ましてや学園都
市の『外』から来た綾季はそういう組織に目をつけられただけでど
うなるかわからない。

「連れて行って、連れて帰るだけって言ったのによォ：何でず
ぶ濡れになったんだよ」

「だ、だからごめんってば…」

「ちよっとアンタ！」

呼ばれたので二人が振り向くと、前髪をピンで留めた茶髪の少女がこちらを睨みながら立っていた。

一方通行が「あ」と小さく呟いたので、一方通行はこの少女が誰かを知っているようだ。

「一方通行。誰？」

「レールガン超電磁砲だ」

「ああ、第三位の御坂美琴！」

御坂は綾季をちらりと見たが、興味を示さない。一方通行に用があるらしい。

「一方通行！何でアンタが常磐台に居たわけ！？」

「何の話ですかねェ」

「しらばっくれんな！」

一方通行は誤魔化すのが面倒になったのか、観念したように言った。

「…チッ。あア、居ましたよ」

「何してたのよ！」

「…イヤその前によォ、立ち入り禁止になってたろ。何で知ってた」

「いいから！！いいから殴らせなさい！！」

「…あのツンツン頭に助けられた命無駄にすんのか」

「う、…でも！あのデカイ音は何！？」

「あ、それ綾季」

御坂はぴくりと眉を動かした。言わないが吉な情報をわざわざ

提示してしまった綾季に、一方通行は舌打ちを贈った。

「…何アンタ」

「え！？え、えーと…」

一方通行が口を「アホ」と動かす。綾季は小さく呻き、咄嗟に嘘を考えた。

「…妹？」

「…は？」

御坂は呆け、一方通行は思わず噎せた。綾季はこれで押し通そうと、「妹だよ」と再び言った。一方通行の眼光が凄まじい。

「…一方通行、妹居たの？」

御坂が一方通行の方を向いたので、その隙に綾季は「ごめん」と口を動かす。一方通行は致し方なく、本当に嫌々、首を縦に振った。

「…へえ」

御坂は腕を組んで、綾季の顔を覗きこんだ。

「で、一方通行の妹さんは常磐台で何をやってたのかしら？」

「し、身体検査、です」

「…プールで？」

あまりの迫力に綾季は頷くしかできない。

「何の能力？レベルは？」

「ぐ、引力操作、レベルは…」

綾季は素直に5と答えようとしたが、一方通行の眼光が「言うな」と言うので「4です」と答えておく。

「……そう。まあ故意じゃないならいいわ。——でも」

御坂がニツと口の端を吊り上げる。

「私、引力操作系の能力者と戦ったこと無いのよねー。…よろしく頼んでいいかしら」

「何でそうなるのっ!!?」

いいじゃない減るものじゃないし。と笑う御坂。

（確実に綾季の神経がすり減るよ!!）

御坂の笑みから生まれる圧力でそんな短い意見すら言い出せない綾季は、助けを求めるように一方通行へ視線を向ける。

「…ちよつと戦って頭冷やせ。人のことずぶ濡れにした罰だ」

「どう考えても戦ったら全身熱くなるから!!」

一方通行はそんな正論を返されても何処吹く風で、むしろニヤニヤ笑っている。

（綾季はたしかに超能力者だけど、学園都市の超能力者に換算したら下位の方だろうし…。無理無理無理無理!!!）

「無言ってことは、やっちゃっていいのよね？」

NOと答える暇もなく、御坂の前髪から小さな雷が綾季の足元に落ちた。綾季は思わず「ひっ」と悲鳴をあげる。

「いくわよ」

静かで凜とした声を掛け声に、御坂の前髪の火花が一層大きくなった。

（何コレ、超自分勝手!!）

御坂美琴（後書き）

さあ次はバトルごますよ！

連投しようか迷ったんですが「まあいいや」という結論に達しました。すいません…！

超電磁砲（前書き）

連日投稿その2。

御坂との戦闘ですお！

書いてて楽しいですが書きにくいです。

超電磁砲

御坂の前髪から光の束が綾季を威嚇するように足元に飛んだ。ぱりぱり！！と何かが破けるような音が響く。

（う…やるしかなさそう…）

綾季は一步後ずさり、自分が出来る精一杯の強い目で御坂を見た。

御坂美琴は学園都市に存在する7人の超能力者の内で第三位の序列を持つ実力者だ。その能力は電気使い（エレクトロマスター）。自由自在に電気、磁力などを操るもので、御坂の応用範囲は広い。

（……………でも）

綾季にとっては、それも『自分の能力が適応する範囲内』だ。綾季は自分の穿いているハーフパンツについていたプラスチックのボタンを拵ると、焦りの中で、小さく笑った。

「やっとなる気になったみたい…ねっ！！」

御坂が今までより大きな光の塊を手添え、綾季の笑みに挑発的な笑みで答えた。ばちばちと一際激しく火花が散り、これからは容赦がないことを示唆する。

「さあ……………どこまでやってくれるかしら？」

御坂の手のひらに収まっていた光の塊がぐわっと大きく羽を広げ、轟音を響かせる。御坂はそのままそれを綾季へ放った。

「っ！！！！」

御坂の手の動きに合わせて、綾季は筆ったボタンを空へ放る。そして、ボタンへ人差し指を向けた。

その行動は、綾季が能力を使うときにするものだった。

ズバッ！！御坂の手から放たれた雷は、ボタンを追うように軌道を曲げ、ボタンに直撃して消えた。

「……何したのよ」

「えーっと…言うべき？」

綾季は落ちてきたボタンをキャッチしながらはにかむ。「あちち」と雷に直に触れ熱を持ったボタンを冷ましながら。

「…へエ」

二人をのん気に見ていた一方通行は、妖しく笑った。

（アイツ、電気の引力も操れんのか）

そう———電気や磁場にも、引力は存在する。N極とS極は引き付けあうだとか、＋と－は引き付けあうだとか言うのは、全て引力というものが存在するからである。綾季はそれを操ったのだ。

「こんなボタン一個にも、一応電気とかってあるんだよね。綾季はそういうのは専門外だけど、そういうこと。プラスチックは抵抗が大きいしね」

御坂は不機嫌そうに「ふーん」と言い、もう一度雷を綾季へ落とす。だが、綾季はまたもやそれをボタンを放り投げ打ち消した。

「————なるほどね。了解了解」

「ね、もう結構暴れたでしょ。止めよ？」

「何言ってるの」

御坂は微笑を浮かべ、

「久しぶりだわ、アイツ以外で本気になるの！！」

バチッ！！と御坂の前髪から火花が散る。御坂はポケットから、コインを取り出した。

「普段は人に向けて撃たないんだけどね！！」

綾季は最初何をするつもりか、と考えを模索したが、コインで思い出す。

（もしかして）

御坂は腕を伸ばし、指先に力を込めた。当然指先には、先ほど出したコインが。

ぱちぱちと音をたて、御坂の顔が彼女の発電した電気で青白く浮かび上がる。その顔はひどく、楽しそうだった。

「さあ、これならどうかしらね！！！！！！」

御坂の咆哮にも似たその声と一緒に、コインが撃ちだされた。

光の束の集まりが、音速の二倍で綾紀に襲い掛かろうとした。ドゴッ！！！！という派手な爆音と、ビュオ！！！！という余波で生み出された暴風。コインを撃ちだされただけとは思えない威力を生み出した『それ』を、人々が何と呼んでいるか。綾季は聞いたことがあった。

『レールガン超電磁砲』。

だが、御坂美琴の必殺技であり通り名にもなっているそれにも、綾季は臆することはなかった。

（電気なら一緒！！）

綾季は今度はボタンを上でなく、超電磁砲にぶつかるように投げた。

パンツと袋が破裂したような音がして、光の束が虚空に消えた。光の消滅は呆気なかったが、余波の風は打ち消されずに吹き上げる。

「————あーあ」

御坂は心から残念そうな声をあげ、頭を掻く。綾季は余波の風で体制を崩し、尻餅をついた。

「超電磁砲まで消されたの、やっぱりアイツ以来…」

「へ？」

「だから！引き分けにしてやるって言ってんの！！」

いやいや、「だから」と言われてもそんなこと微塵も言ってなかったじゃないか、と綾季は呆氣にとられる。座り込んだまま呆ける綾紀に御坂は手を差し伸べた。綾季は手と御坂の顔を見比べ、その手を掴んだ。

「で、アンタ。本当に大能力者？」

「え」

綾季の出した一音は呻き声に近かった。

「私の超電磁砲を消しておいて、大能力者ですって？」

（あれ、丸く収まりそうだったのに）

御坂は自分以下の人間に必殺技とも言える超電磁砲を消されたことが許せなかったのだろう。口元はにこやかだが、目が笑っていない。

「あ、一方通行ー…」

「そこで俺に振ンのかよ」

馬鹿正直な綾季は嘘を突き通すのに大きな罪悪感を感じ、一方通行に助けを求める。一方通行は深く溜息をついて、

「…5」

「…は？」

「だから、5」

一方通行は一方通行で、嘘を突き通すのが面倒になったのか、綾季を代弁して言った。御坂は瞬きを二回ほどして、呆然とする。

「8人目の――」

「そういうわけだから、じゃアな第三位。あとこのことは誰にも言うな言ったら殺す」

相変わらず物騒だ、と綾季が思ったその時――

ボタンを筆記取ったことによって緩くなった綾季のハーフパンツが、すんと、と落ちた。

「え」

当然、隠れていた太ももが露わになり。当然、可愛いドット柄のパンツも露わになり。

綾季の顔が無機質な表情へと変わっていく。御坂は一方通行を見、溜息をついた。

「――あくせられたん？」

「待て誰だソレ」

一方通行は身の危険を察知せずには居られなかった。綾季とて超能力者。綾季はハーフパンツを引き上げながら、叫んだ。

「こんの、ロリコン!!!」

「オマ、ガキ扱いしたら怒るだろオが――!!!」

チャージャーの充電が大幅に減ったことは、言うまでもない。

超電磁砲（後書き）

ラッキースケベをやることが夢でした（真顔）

次はどうなるやら…というか2章入りするかもです。

迷子（前書き）

新章です！

前まで一話や二話単位でしたが、ここから超繋がります。

全部で10話程度で収めようと思ってるんですが…

迷子

「えー！？一方通行来ないの！？」

グループのキャンピングカーにて、綾季は抗議の声をあげた。

遅刻を全くしない一方通行が今日は珍しく遅いなあ、と綾季が丁度居た土御門に言ってきたので、土御門が一方通行の欠席を伝えたのだが――綾季の受けた衝撃は計り知れないものだった。

「休暇ってやつだにゃー。そんなにショック受けなくても」

「やだやだやだ！」

「相当なつかれてるにゃー一方通行」

「ち、違うよ！そういうわけじゃなくて、その…」

「？」

「妹になっちゃったし…」

「どんなプレイだそれはあ！？」

つつい立ち上がって叫んでしまう土御門。綾季は土御門の「プレイ」発言に赤面し、慌ててはぐらかす。

「別に変な意味とか無いから！勘違いすんな！」

「…だよなあ。一方通行が変態兄貴攻めになるわけないか…」

「あ、あにき…」

「ん？顔赤いぜよ綾季」

綾季でも一応思春期である。綾季は顔を真っ赤にしながら立ち上がり、

「ちょっと外の空気吸ってくる！」

「え？ ああ：早く戻れよ？」

綾季は土御門の言葉を待たずしてキャンピングカーから飛び降りてしまった。

心なしか重い足取りでとりあえず歩く綾季。

（えーと、これもしかして…）

周りに知っている顔は一つもない。それだけでなく、大きな道路の両脇に建つ建物すら、初めて見るものしかない。

…要約して言うと。

（迷った。かも）

かも、とつけたが、これはもはや間違いない。綾季は立ち止まり、大きく溜息をついた。

土御門に「プレイ」だの「変態兄貴」だのと思春期の少女が妄想を逞しくさせる単語を並べられ、ばか正直な綾季が平然としていられるわけがない。…まあ、綾季のリアクションは平均以上だったが。

（だ、だって綾季、ずっと研究所に居て慣れてないんだもん…）

綾季はそう自己完結させ、項垂れた。

きゅううう…

綾季の腹から可愛らしい音が鳴る。空腹のサインだ。これが鳴ってしまうと、何かを食べるまでどうにも止まらないことを綾季は知っていた。

「最悪…」

思わず呟く綾季。

と、そんな綾季の横を、さらさらたなびく銀が通り過ぎた。続いて学ランの黒。

「とうまとうま！今日こそお肉が食べたいかも！」

「インデックスさん？ちょっとはお肉を何とか食卓に出そうと悪戦苦闘している上条さんの努力も知ってくださいな」

綾季の耳には食卓事情に思い悩む少年の声は聞こえていなかった。代わりに『お肉』という単語のみが鮮明に。

気づいたときには叫んでいた。

「お肉！！」

「…え？」

黒いツンツン頭の少年は、綾季の意味不明な咆哮に反応してしまったことを後々後悔することになる。というか、叫ぶことになる。「不幸だ」と。

帰ってこない。土御門は汗をだらだら垂らして、どうすべきか迷っていた。

（え？何で帰ってこないのアイツ。ちょ、ヤバくね？確かアイツ終われてたりしてたよな？うわわわわやべーってコレ！上に知られたら…いや、もう知ってるかも…もし綾季が追っ手に捕まったりしたら…）

終わる。

土御門は慌てて携帯を取り出し、『戦友』の一人に電話をかけた。ワンコールで繋がった。

「海原！」

キャンピングカーから降り、行くあても無いのに走る。

電話越しの涼やかな男声は、凄く慌てっぷりの土御門に対して、のん気に答えた。

『どうしました？土御門さん』

「保護したエージェントが居なくなった！」

『ああ、あの女の子ですか。逃げたとかではなく？』

「逃げたわけじゃないと思う。アイツはばか正直だからな」

海原はそうですか、と笑った。

『わかりました。こちらでも探します。見つけたら連絡しますね。結標さんや一方通行さんにも言っておきますか？』

（一方通行は恐らく打ち止めとランデブー（？）中だろうから呼び出したら死ぬ。結標は知ったらサングラスのレンズだけ座標移動ムーブポイントされるだろうし…）

「…あいつらはいい」

『了解しました』とクスクス笑う声が電話越しに響き、通信が途絶えた。

迷子（後書き）

ちと短め…かな？

昨日結構書き溜めたのでこれから毎日うpするかもです。

上条当麻（前書き）

上条さんやっと思せました。

というかこの章一方通行出てくるんだろうか…。

今回もう一人オリキャラ来ます。

上条当麻

綾季はとある学生寮の一室に居た。

綾季は部屋の真ん中にあるテーブルに座っているの、部屋全体が見渡せるのだが、部屋は綺麗に片付いており、ここに住む少年の家庭的スキルの高さを物語っていた。

で。

ここに住む少年というのが。

「竜守。チャーハンで良かったか？」

黒いツンツン頭の少年——上条当麻と名乗ったのだが——が、出来立てのチャーハンをキッチンから運んできた。

「良いよ、ありがと。いただきます！」

「とうま！私の分が無いんだよ！」

この部屋の居候だという銀髪のシスター、インデックスが喚く。上条は「ありません」と淡々と言い、溜息をつく。

「ああ、見たことも聞いたこともない女の子にご飯を作ってあげることになるなんて…食費一食分増えた…不幸だ…」

「さ、先に声をかけてきたのは…！…綾季だ、ごめん」

「今日は朝から水道管から水漏れしてたりとか、ベランダに干してた布団に鳥のフンがついてたりとか…不幸すぎる…」

綾季は苦笑い。上条は気を取り直して、綾季に問うた。

「で、お前は何で空腹の上手ぶらでフラフラしてたんだ？」

「みゅ？」

結局あの「お肉！」という悲痛な叫びに反応してしまった上条は、他人のフリをすることが出来ず、泣く泣く綾季をここまで連れてきたのだった。食べさせたのは肉ではないが。

「もしかして、迷子とか」

「う、」

「…図星かよ」

「うう…」

「大丈夫！」

不本意とはいえそれが本当だ。図星を貫かれるとやはり痛い。項垂れ始めた綾季の肩を、インデックスが叩いた。

「迷える子羊には救いの手を！なんだよ！」

「珍しいじゃねーか。インデックスがそんなこと言うなんて」

「とうま…私は気づいてしまったんだよ」

インデックスが無い胸を張り、自信満々に言った。

「何かしら手柄を立てれば、とうまは私の凄さを実感してご飯を恵んでくれるはずなんだよ！」

「シスターがそんな下心丸見えなこと言って良いのかよ」

上条は溜息をつき、綾季に向き直ると、

「まあ一人は危ないし、俺達も手伝ってやるよ」

「ほんと!？」

「ああ」

綾季は目を輝かせて言った。

「ありがと!当麻!」

「で、お前はどこから来たんだ?」

「:キャンピングカーみたいな車」

「車:..?」

生憎思い当たらない上条とインデックスは「うーん」と小さく唸った。綾季は慌てて訂正する。

「あ、もしかしたら一緒に居た人が探しに来てくれるかも…」

「どんな人だ?」

「えーつとね、金髪でサングラスかけた:」

インデックスと上条には思い当たる人物が居たが、「まさかな」と流す。

「わかった、じゃあ二手に分かれてそういう人探して、見つけたら連絡入れてくれ。インデックス、携帯の使い方わかるよな?」

「もちろんなんだよ!」

インデックスは自信満々に携帯を振りかざして言った。シスターに携帯ってミスマッチだな、と綾季は思ったが、折角手伝ってくれるのに気を悪くされてもどうにもならないので黙っておく。

そこで、インデックスがあることに気づき、上条に問う。

「綾季はどっちと一緒に行くの？」

「あー…」

上条は一拍置いて、

「俺とだな」

「了解」

「とうま、手出したりしないよね」

「出さねーよ。第一お前に任せたら見つかるもんも見つからなさそうだし」

失礼なんだよ！！と憤慨するインデックス。綾季は苦笑いしつつも、

（その通りかも…）

と失礼なことを思った。

「じゃ、行くか竜守」

「うん」

「言っとくけどとうま！！私が見つけたらお肉だからね！」

あーはいはい、と生返事をする上条に、綾季は再び苦笑いを浮か

べた。

越えられない壁、というのは誰にだって存在する。そんな当たり前のことは弁えているつもりだったが、少年は現在、その壁にぶち当たって苛立っていた。

（学芸都市唯一の超能力者になっておいて、逃げ出しただって？）

少年の綺麗な金色の髪が風に揺れる。髪と良く合う透き通った蒼い目は、勿体無いことに怒りで燃え、禍々しく光っていた。

（俺の『超えられない壁』の癖に、絶対能力者になるのを拒んだだって？）

少年はやって来たリムジンに乗り込み、手馴れた手つきで何度もかけた番号を電話帳から引っ張り出し、通話ボタンを押した。それとほぼ同時にリムジンも発進する。しばらく相手が電話に出ず、少年が貧乏ゆすりを始めた頃に、やっと電話が繋がった。

「おい。万有引力は本当に学園都市に居るんだろうな」

『居るに決まっている。前に送り出した二人が接触したと言っていた』

「まあ居なきゃ困るよな。わざわざ学園都市まで来たっていうのによ」

『—————言っておくが、殺すんじゃないぞ。アレは学芸都市の重要な人材だ』

何度も聞かされたその言葉に、少年は忌々しく舌打ちをした。

「はいはい」

『：頼むぞ。万有引力に対抗できるのはお前だけだからな』

「はいはい」

『では健闘を祈る。——ライエ』

少年——ライエは通話を切ると、

「殺さねえワケねえけどな」

上条当麻（後書き）

物騒な単語が好きなんだろうなライエは…。

厨二な子は書いてて楽しいです。

探し人と目的と（前書き）

二桁の大台に上りました！

気がつけばアクセス数が凄いことに…本当にありがとうございます！

探し人と目的と

「あ、ゲコ太!!」

「オイコラ走ンな!! 転ぶぞ!!」

一方通行の注意にも耳を貸さず、大好きなカエルのマスコット『ゲコ太』ぬいぐるみへ一直線に走る打ち止め。転びはしなかったからいいが人の話をちゃんと聞けよ、と一方通行は思った。

「ね、これ可愛いよね! ってミサカはミサカはゲコ太ぬいぐるみにぎゅーっ!!」

「あーハイハイ…可愛い可愛い」

「むうう!! 何その興味のなさそうな返事はー! ってミサカはミサカは憤慨してみるんだけど!」

「悪イ悪イ…で、それ買うのか」

一方通行が問うと、打ち止めは今までひよこひよここと元気に動いていたアホ毛をへたらせた。

「欲しいけど、今のミサカのお小遣いじゃ無理かな…ってミサカはミサカは…」

一方通行は溜息をついた。超電磁砲といい他の妹達シスターズといい、何で姉妹(?)揃ってこんなモンが好きなんだ、とでも思っているような顔だ。打ち止めはそんな一方通行の顔を見て、頬を膨らませる。

「な、何なのその顔は…ってミサカはミサカは不機嫌になってみたり…」

「……貸せ」

「え？」

打ち止めからぬいぐるみを取り上げ、そのままレジへ向かう一方通行。打ち止めの膨らませていた頬がみるみる桃色に染まっていく。

「え、もしかして買ってくれたりするの？ってミサカはミサカは一方通行の優しさに感動してみたり」

「…代わりに大事にしろよ」

打ち止めは目を輝かせ、「うん!!」と元気に返事をした。つい
つい一方通行の口元も緩みかける。

二人に相反して、土御門は半泣きで綾季を搜索しているというの
に。

「居ないなあ土御門…」

綾季は広場のベンチに座り、小さく漏らした。上条は「ちょっと飲み物買ってくる」と言って、今はここに居ない。

綾季は何の気なしに顔を上に向けた。空は赤く染まっており、東
の方は闇が侵食していた。あと数分もすれば日が沈むだろう。

（土御門達にとって綾季は保護の対象でしょ？探してないわけ
ないし…）

どうしてこうなったのか、と事の発端を思い返す綾季だったが、よくよく考えれば土御門の注意に耳を傾けなかった自分のせいである。

（いやでも、土御門が変なこと言うからだし！）

自分で百歩譲り、綾季は溜息をついた。

「竜守」

名前を呼ばれて顔を上げると、上条が缶飲料を二つ持って立っていた。

「緑茶で良かったか？」

「うん。ありがと」

綾季は缶を受け取り、両手で包み込むように持つ。上条は綾季の隣に腰掛けた。

「見つからねーなあ」

「うん…」

「あとちよつとで日も暮れるだろうし…どうすっかな…」

「…あ、あのさ」

上条は「ん？」と頭を傾げた。

綾季はこれ以上迷惑をかけたくなかった。それに、追われている自分の側にいるのは、何よりも危険である。一方通行のような超能力者ならまだしも、上条は一般人で更に無能力者なのだ。

それに、自分は普通の人間と一緒に居ない方がいい。

「もういいよ。折角探してくれたけど、これ以上迷惑かけるのもアレだし」

「え、」

上条は「いいや、まだ手伝う」とでも言おうとしたのだろうが、綾季がそれを遮って言った。

「インデックスだって居るでしょ？綾季はいいから、そろそろ戻った方がいいよ」

正論に言葉を詰ませた上条は黙った。綾季は続ける。

「そろそろうち————保護者代わりのアイツも見つかるだろうし、大丈夫」

「そう、か？」

「うん」

綾季は立ち上がり、

「お茶はありがたく貰うね！今日はありがとう。じゃあまた！」

ぱたぱたと走り出す綾季。上条は「え、」と呻き声に近い声をあげたが、引き止めることはしなかった。出来なかったのかもしれないが、綾季にとってはそちらの方が都合だ。

（追っ手が来たら当麻が無事じゃ済まないもんね）

上条の姿が見えなくなったところで、土御門を探すために辺りを

見回す。気づけば空は赤から藍色に変わり、辺りを照らしているのは街灯や窓から漏れる家の照明の光だけになっていた。人通りもまばらになっている。

（あんまり一人で居たら駄目だよなあ…さっさと見つけて帰ろ）

そんな綾季を見て笑う、少年が一人。

全く見つからない。土御門は広場のベンチで項垂れていた。

綾季は超能力者だというし、一人にならない場所で待機するくらい出来るだろう。だがどうしたのか、土御門がどれだけ探し回っても、視界の隅にすら入らないのだ。

土御門は本日二回目、海原に電話をかける。相変わらずワンコールで繋がったが、ちゃんと探してるんだろうなコイツ、と土御門は疑う。基本疑われるのは彼の役目なのだが。

「おい、見つけたか!？」

『すいません、ちよつと結標さんからお話を聞いていまして』

「てんめー! 薄情者おおお!!」

『あはは、すいません』

土御門は深く溜息をつき、

「てことはお前は探してないんだな…」

『まあそういうことになりますね。ただ——』

一拍おいて、海原が声色すら変えずに言った。

『綾季さんが学園都市に來た理由、及び学芸都市に追われている理由。結標さんから報告がありました』

何？と眉をピクリと動かす土御門。項垂れていたせいで前屈みになっていた姿勢を、慌てて戻す。

「何だよ、それは」

『絶対能力進化実験です』

海原はやっぱり声色一つ変えなかった。

探し人と目的と（後書き）

海原は果たして電話越し以外に出番があるのか…。
何とか出したいです。

幸せいっぱい一方通行と打ち止め。

絶対能力進化実験（前書き）

なんだか急展開な話。

相変わらず海原は電話越しです。
ごめんね海原…。

絶対能力進化実験

「絶対能力進化実験…だって？」

『ええ』

土御門はサングラスの奥の瞳を大きく見開いた。海原はそれでも続ける。

『学芸都市は学園都市に対抗するために造られた都市ですから、学園都市を追い越すために学園都市でも到達できなかった絶対能力者を作り出そう、とでも考えたんでしょうね。そのために学芸都市最強の超能力者である綾季さんに、実験をさせようとした。ですがその実験内容は一方通行さんと同じ、むしろそれ以上——』

土御門はおもむろに口を開いた。

「二万以上の人間を、殺すのか」

『正確には二万通り以上の戦闘を行う』です、と返す海原。土御門は折角戻した姿勢を、再び項垂れることで丸めてしまった。

（二万以上の人間を殺すなんて確かにアイツには荷が重い）

土御門は綾季の憎たらしい笑みを思い出す。すでに土御門は事の重大さに押し潰されそうなのだが、海原は残酷にも続けた。

『それも、「妹達」を再利用するそうなんです』

土御門の思考が一瞬停止した。

(一方通行——)

一方通行は打ち止めだけでなく、妹達を守るためにこの世界に居る。一方通行は何を思っ、どう行動するだろう。土御門は学園都市最強の怪物が暴れだす図を想像した。想像するのは容易かった。

『万人ほども十分人材を削減できますしね。既に学芸都市は学園都市に「妹達」の譲渡を申請しています』

海原の心地よく穏やかな声で、土御門は我に帰った。まずは情報を整理することが必要だ。

「で、逃げてきたと。でも逃げるだけじゃどうにもならないだろ」

『それが、綾季さんの目的はまだあってですね』

電話越しにがさがさという紙がかさばるような音がした。そして海原は咳払いをすると、

『綾季さんは、統括理事長と面会し実験の無期限凍結を検討させようとしてるようなんです』

統括理事長。名を、アレイスター。それは土御門がよく知る人物だった。生命維持装置の中でしか生きられないか弱い人間。それでいて誰もそいつに抗おうとしない。謎の多い人間だ。土御門が知るアレイスターとは、彼の小さな断片程度なのかもしれない。

「アイツはそんなにお人好しじゃないけどな」

『あはは、まあご理解頂けたのなら綾季さんを搜索しましょうか』

「おう」

『では…あ、そうそう』

「？」

『結標さんに言っちゃいました。綾季さんが迷子だって。多分結標さん経由で一方通行さんにも伝わるかと』

「アホか！？止めようとか思わなかったのか！？」

『僕にとっては別に不利益になりませんし、この際』

海原ののん気な笑い声が、土御門には悪魔のせせら笑いにしか聞こえなかった。

土御門は電話を切った。

殺すな、とは言われた。だが、その一言で自分が喉から手が出るほど欲しいものを断念させられるくらいなら、いっそそれを振り切ってしまったほうが良い。

少年——ライエは、ゆらりと立ち上がる。

目的は『万有引力の抹殺』。『万有引力の奪還』なんていう陳腐なものではない。それに関係のない一般人が多く居るここは、『心の優しい』綾季の力が制限される場だ。殺したくても殺せなかった相手を殺すにはもってこいのタイミングである。『心の優しくない』ライエは笑みを押さえられなくなって、口元を緩ませた。優しい人間はそれだから損をする。

綾季は「どこさもー」とかなんとか言って、辺りを見渡している。ライエは今まで顔を合わせる度に苛立ちしか覚えなかった綾季の顔を、遠巻きに舐め回すように見た。

（ぐちゃぐちゃにしてやるよ。忌々しいその面をな！）

沸き上がる殺意に飲まれた少年は、妖しく笑って一歩進んだ。そして、

「よお、元気か？」

綾季はライエの声に肩を揺らし、目を見開きながらこちらへ顔を向ける。ライエは自分の体から、どろどろとした殺意が溢れてくるのを感じた。もう、止まらない。

「らい、え？」

「会いたかったよ。こんなにお前に会いたいと思ったのは初めてだ」

もちろん、良い意味でなく。綾季もそれを感じ取ったのだろう。一歩後ずさった。そして、

「何でここに」

「あ？お前を追ってだよ」

ライエは『お前を殺すために』というニュアンスを込めて答えたつもりだったのだが、綾季は別の方向で受け取ったらしい。綾季はライエに背を向け、逃げるように走り出した。ライエは彼女が死を恐れているとは思えない。ライエは溜息をつく、綾季を追うために走り出す。

力を使うのはまだ早い。

『学芸都市はあの「絶対能力進化実験」を「妹達」でやろうとしてるみたいよ』

一方通行は脳裏にすっかり焼きついてしまった結標の声を繰り返して再生し続ける。もう何度繰り返したかわからない。

打ち止めの手を握る自分の手が、汗でじっとりと湿っていくのがわかる。

「ねえ、どうしたの？ ってミサカはミサカは聞いてみたり」

打ち止めが身長差故の上目遣いで聞いてくる。一方通行は返さなかった。というか、返せなかった。

（あのガキ、『計画』ってこれのことか）

一方通行は打ち止めの手を引いて保護者の住むマンションへ向かいながら、舌打ちをした。打ち止めの彼を見る目は依然として不安そうにしている。一方通行は、彼女の不安を拭う方法が思いつかなかった。

絶対能力進化実験——かつて一方通行も、『絶対能力者』になるために参加したことがある。それは突如現れた『最弱』に『最

強』が敗れたことで、凍結したはずだ。———学園都市では。

だが、学芸都市では？

（あのガキ、学園都市を追い越すとか言ってたなア…それでか）

学芸都市が学園都市で到達出来た者は誰一人として居ない『絶対能力者』を創り出すことに成功すれば、学芸都市＞学園都市という図が誰の頭にも浮かぶであろう。学芸都市はそれを狙っているのだ。

（そのために、妹達が殺されるだど？）

一方通行は、彼女たちを殺しすぎた。

浴びた血は、無意味なものだった。

罪は、償わなくてはならない。

———これ以上妹達を、『死なせない』ということだ。

「————ふざけンじゃねエぞ」

近くに居た打ち止めでも聞き取れないくらいの小さな声で。

綾季を手助けする借りが出来た。

絶対能力進化実験（後書き）

一方通行始動！

綾季と合流するのはいつになるのやら…。

搜索（前書き）

ライエがヤンデレな件について。

多分短い章なので色々気になる点とか出てくるかと思いますが、最終章に全部種明しするつもりなのであしからず。

搜索

（どうして、ライエがここに居るの！？）

綾季は人の居なくなるところまで走っていた。彼に対抗するには、能力を使わなくてはいけないことを綾季は知っていた。そのために思うままに能力を使える場所——すなわち、人の居ないところまでライエを誘導しなくてはならない。

綾季が力を使えないのなら、ライエもそうではないのか、と聞かれれば、綾季は首を横に振るだろう。綾季の知るライエは、『他人を巻き込みたくない』という心すら持っていない。

（何でここはこんなに人が多いのさ！！）

綾季は懸命に走っていたが、いつこうに人が居なくなる気配は無い。照明が少し減ったくらいである。学園都市の人口が230万人というのは綾季も知っていたが、その数字は大きすぎて実感できずにいた。この状況になって初めて、数字の大きさを理解する。

ちらりと後ろを見ると、ライエは———居ない。

「え」

あれは幻覚だったのかも、というパラレルなことを一瞬考えた綾季だったが、背後から響いた少年の声に一気に現実へと引き戻される。

その声は。

「誰が行かせるかよ」

いつの間にか先回りしていたらしいライエの足が、綾季の背中を蹴り飛ばす。大した威力ではなかったが、綾季の体は後ろに反って、地面に膝をついた。周りの一般人が、「何だ喧嘩か」と二人を冷えた目で見、避けて歩いていく。

「な、」

「お前がここに居る限り能力を使わないってことくらいわかってんだよ」

「お前は善人だもんな」と嘲笑うライエ。綾季は地面に手をついて、逃げようと足に力を込める。が。

「駄目駄目————ここで逃がせるか」

綾季の襟を掴み、上に引き上げた。そのまま閉まっている店舗のシャッターに首をやりわりと押し付ける。綾季の呼吸が一瞬止まったが、すぐに肺に空気が送られ、綾季は呻いた。

「らい、え…」

「お前を保護してるっていう暗部は何してるんだろなあ？」

綾季が息を呑む。

（土御門、結標————一方通行!!）

ぼーっとしながら、上条当麻は夜の街を歩く。

（インデックスは流石に家に帰ってるよなあ…まだ夕飯には早いけど、アイツのことだからもう腹減ったとか言い出しそうだ）

上条はそんな他愛も無いことを思いながら、やはりあの少女のことを忘れられずにいた。

（竜守……大丈夫かな）

綾季は「大丈夫」と言ったが、いまいち信憑性が無い。もしまだ見つかっていないとしたら、中学生ほどの女の子が夜の街を一人で歩いているということになる。そんなのは無能力者の武装集団、通称『スキルアウト』やらチンピラやら物騒な輩の格好の獲物だ。

（うあー！やっぱ気になる！！）

上条は携帯電話を取り出して、『身近な頼れる大人』に電話をかけた。その大人というのは。

「もしもし、小萌先生!？」

『はい? どうしました上条ちゃん?』

上条の担任、月詠小萌。成人女性とは思えないほど背は小さく、さらに小学生真っ青なつるぺたプロポーションを持ち、———まあ簡単に言うと、『ロリ』という類に入る女性である。

「インデックス頼めますか!？」

『え?』

「ちよつと急用が出来て帰れなくなったので!」

『はあ…で、シスターちゃんは家に居るんですか?』

「家の電話にかければ繋がると思いますが!じゃ!」

『え!?! ちょ、急用ってなん———』

小萌先生の高い猫なで声（本人無自覚）を途中で切り、上条は綾季の搜索に走った。

打ち止めを黄泉川に押し付け、夜の街に繰り出して来たは良いが、これからどうしたものか。

一方通行は考えた。

（あのガキを探しに行きゃアいいンだろオけどよ…いくらなんでも広すぎる）

それに面倒だ。一方通行は溜息をついて、綾季を逃がした（?）とみられる土御門に連絡を取る。すぐに電話は繋がった。

『えー…と。あくせられーたかにゃーん?』

「そオだ」

『す、すいません。そのー…』

土御門の声は震えていた。一方通行は気にせず吐き捨てるように言った。

「逃がしたこうはどオでもイイ。とにかくあのガキの居場所だ」

『それが、まだ：昼から探してるんだがな』

「オマエ探すの下手糞なンじゃねエの」

『失礼な』

小さな漫才をやっている暇はない。今こうしている間にも、綾季が追っ手に捕らえられているかもしれない。

「とにかく探すしかねエってか」

『ああ』

一方通行は舌打ちをしながら電話を切ると、首にあるチョーカー型デバイスの充電を確認する。

（もしかするってこともあるかもなア）

「越えられない壁はな、跨ぐよりぶち壊すほうが楽なんだよ。基本的に」

綾季は言葉を聞いて、呻くしか出来なかった。ライエは吊り上げていた口の端を通常の形状に戻し、淡々と言う。

「だから殺そうと思うんだが、異論はねえな？」

「ころ、す？」

「そうだ」

綾季の無気力になっていた腕がぴくりと揺れる。

（ライエは綾季を捕らえて学芸都市に連れ戻すんじゃないの――
―？）

殺す、という単語は意味のわりに小さすぎて、綾季はついつい受け止めることが出来なかった。

「そうすりゃ学芸都市の第一位は俺になって、今までお前が受けていた能力開発も俺に引き継がれて、俺は晴れて超能力者だ」

綾季は言葉を聞き、目を細めた。そして、

「結局、強さが欲しいんじゃない。そういう、くっだらない考えだから…大能力者の枠から出られないんだよ」

嘲笑った。精一杯嘲笑った。

ライエも笑い返した。

「やっぱりお前は殺さなくちゃなあ」

その声と重なるように、第三者の声が響いた。

「竜守!?!」

搜索（後書き）

この章のテーマは『優しさ』と『嫉妬』と『絶望』です。三つもあります。あれれ？

多分連結しますよ！うん！

怪物（前書き）

短い…！

今回短いです…！

あとライエの能力紹介です！いいかげんキャラ紹介とか…とか…。
そうじゃなくても挿絵とか…。

怪物

「竜守！」

期待した声と違った。顔を声のした方へ向けると、黒いツンツン頭の少年が走ってこちらに向かってくるところだった。

「誰だよアレ」

ライエは目を細める。

綾季は、その少年の名前を知っていた。というか、さっき――

「当、麻……」

その少年は、さっき別れたはずの上条だった。

「大丈夫か！？おいお前！竜守に何した！？」

上条は押さえ込まれた綾季をライエの手から引き剥がし、怒鳴る。二人の体勢的にライエが綾季を脅しているところでも思ったのだろう。あながち間違いではない。

「当麻、何で」

「やっぱり心配でさ、探したんだよ。走っていくのが見えたから追ってきた」

綾季は「だから危険だって言ったのに」と言う上条に、

「ダメ、逃げて！」

「お前も一緒に逃げるぞ」

「それは——」

「駄目だよそりゃ」

ライエがニタリと笑って言った。上条は胡散臭げな目でライエを見る。

「俺は万有引力を殺さなくちゃいけない。お前は邪魔だからどっか行け」

「『アトラクター』？ 殺す？」

ライエは「ああ、知らないのか」と言い、面倒そうに、かつ楽しそうに説明した。

「そいつはな、怪物なんだよ」

綾季が震えた。ライエはそれを楽しそうに眺める。

「そいつは人間離れしすぎた能力を持ってる。お前も学園都市に住んでるなら言ってる意味がわかるよな？」

上条が綾季とライエの顔を見比べる。綾季は自分の体を抱いて、

「ライエ：もう止めて。当麻は何も関係ないんだよ。だから」

「怪物の癖に善人ってのも可笑しな話だよなあ。あれ、人じゃねえか」

「何言ってるんだよお前ら！」

綾季は小刻みに首を横に振り続けていた。関係の無い一般人に、

自分の私情のせいで傷ついて欲しくなかった。そして。

怪物である自分を知らない上条が、『人間』として自分を見てくれることが何よりも嬉しかったから。

ライエは笑って、言った。

「そいつは超能力者だよ。正真正銘の化け物だ。化け物で、憎むべき相手だ。だから殺すんだ。」

「だからどうした」

間髪入れずに返した上条の目は、怒りで爛々と燃えていた。ライエと綾季は共に、目を丸くする。上条は綾季を自分の後ろへ追いやって、言った。

「お前と竜守の間に何があったのかは知らない。知らないけどな！少なくとも竜守っていう超能力者は怪物なんかじゃない！！」

綾季は呆然と、それを見つめていた。それはライエも同じだった。

「殺すとか何とかそういうことを簡単に言うお前の方が、人間性の欠片もねえよ！！」

「当麻！！」

綾季が上条の左手を引いた。

「駄目だよ当麻。これ以上はここに居ちゃ駄目」

「竜守——」

「そうだな。邪魔だ」

ライエが上条の右手に触れた。

「どこにも行く気ねえなら、俺が病院送りにしてやるよ」

ライエがしようとしたことは簡単だ。

上条に、自分の能力を使おうとしたのだ。

「俺の能力は『リボルションオペレート斥力操作』。斥力を操る能力なんだけどさ。斥力って何かわかるか？」

上条は動こうとしなかった。好都合だとライエは思う。このままコイツは指の関節が全て外れて、痛みで無駄口叩く暇もなくなるだろう、といったことしか脳に無かった。綾季が息を吸う音が聞こえるが、そんなものは気にしない。ライエはそのまま、能力を発動させた。

————はずだった。

「……は？」

ぴきん、と音がした。何も起こらない。上条が何か能力を持っているのかとも思ったが、自分の『斥力操作』を無効にする能力者など、綾季の『引力操作』くらいしか思いつかない。ライエは、そして綾季すら、啞然とした。

「——何お前」

「何かよくわかんないけど、」

上条は綾季に掴まれていた手で、綾季の手を握り返す。そして、

「これ、逃げて正解だよな？」

綾季の手を引き、上条は呆然としていたライエに踵を返した。簡単に言うと、————逃亡である。

怪物（後書き）

もっと頑張れ俺 W W W

この時点で課題が多すぎる…。綾季の過去とか、ライエの能力とか、ライエの嫉妬の理由とか…。

最終的に繋がるように頑張ります…ひい…！

第二位の過去（前書き）

昨日更新し損ねましたね…毎日とか言っておいてすいません。

やっと課題一個解決かと！課題一個の半分の間違いですすいません。
多分まだありますライエの過去話…。

第二位の過去

「超能力者？」

「そうだ。お前よりずっと凄い。——お前もあんな風になれれば良かったのに……」

綾季に会うことになったのは、俺が10歳のとき。俺の能力開発を担当してる研究者が紹介してきたからだ。この研究者は嫌いではなかったが、俺の能力云々になると冷たくなる。まあこの職の目標は超能力者を生み出すことだし、中途半端に大能力者な俺を見れば、仕方が無いと思う。

大能力者の俺より強いんだから、さぞ腕っぷしも強いんだろう、と当時の俺は考えた。安易に想像できた。弟子入りでもしようかとすら思った。けれど。

「ほら、彼女がそうだ」

そこに居たのは、俺より一回りも二回りも小さく、俺の2歳下の少女だった。

最初は誰だって信じられないだろう。俺だってそうだ。こんな小さな少女が学芸都市唯一の超能力者だなんて。

まあ、その少女が綾季なわけだが——俺の心に生まれたのは、尊敬でも畏怖でも、ましてや仲良くなりたいという気持ちでもなかった。

嫉妬だった。

あんな少女が第一位。俺を差し置いて第一位。そんな感情と、あの一つ。

彼女の周りの人は、皆彼女を持て囃す。ドロドロとして、心地良
いとはお世辞にも言えないその感情は、生み出されてすぐに生みの
親の俺を飲み込んだ。

（アイツを超えれば、俺も———）

「アナタが第二位の人？」

ふとかけられた言葉に、強い怒りを感じた。周りから見ればあ
どけない言葉だろうが、俺から言わせてみれば、ただ目下の人間を
嘲笑するようなものだ。俺は何も答えなかった。

代わりに。

「なあ、勝負しよう」

「勝負？」

「そうだ。俺がお前に勝ったら順位を変える。」

綾季は即答した。

「やだ」

瞬間、俺の不愉快指数が跳ね上がった。理由は簡単だ。

「何だよ。負けるのが怖いのか？」

「違うよ」

「またも即答だった。綾季はこっちを澄んだ瞳でじっと見つめ、声色一つ変えずに言った。」

「アナタじゃ綾季に勝てないよ」

「そんなの」

「やってみなきゃわからねえだろ、と言う前に、綾季は「それに」と言葉を被せ、

「綾季はもう、人を傷つけないんだよ」

ライエは上条と綾季が逃げていった方を呆然と見つめながら、かつての綾季との邂逅を思い出す。

（この期に及んで逃げんのかよ…）

ぶっちゃけたところ逃げたのは上条の意思であるが、ライエはそんなの気にしない。ライエにとっては上条はただの邪魔者である。

（さて）

「傷つけないとか、今更すぎるだろ」

「————初めて会ったその時にはもう、彼女は絶望を知っていた。ライエは舌打ちをし、二人を追うために走り出す。」

「とう、ま！」

どれほど走ったかわからない。綾季が苦しそうに肺の中の空気を搾り出すように言ったので、上条の足はやっと止まる。気づけば周りに人は居ない。上条の頭は何も考えていなかったで、それすら気づかなかった。とにかく逃げなくてはならない、という感情に飲み込まれてしまっていたのだ。

「あ、…竜守」

「はあっ、…つか、れた」

手を引かれていたとはいえ、男子高校生の脚力に今まで付いてきていた綾季の体力は削られ放題だった。上条は肩で息をする綾季に、「ごめん」と小さく謝る。

綾季はそれでも、笑顔を作る。

「ううん。———当麻が居なかったら、多分今頃———」

殺されていた、とは言わなかった。綾季は大方息は整ってきたが、額は汗でしっとりと湿っている。

「なあ、竜守———アイツはお前の何なんだ？」

「……良く言うと、幼馴染…かなあ」

「…悪く言うത്？」

「綾季はね、」

綾季は5秒ほどの間をおいて、

「ライエに、嫌われてるんだ」

上条は息を呑んだ。聞いちゃいけないことを聞いたのかもしれない。彼女にとってそれを言うことが、苦痛だったかもしれない。それ以上に、そう言った綾季の表情が。

寂しくて、怖くて。それでも無理やりその感情を押さえ込んだよ
うな笑みだったから。

「…当麻？」

「……………あ、ごめん」

「ライエは、そのうちここまで追ってくるよ」

「え？」

上条は正直、それはないだろうと思った。ここは先ほどの場所か
らかなり離れていることを、上条は知っていた。

でも、あのライエはその程度で諦める輩じゃないらしい。綾季の
言ったそれは既に確信のようで、彼女の声は自信に溢れていた。

「だからさ、逃げてよ当麻」

綾季は憎たらしいほどの笑みを浮かべて言った。当然上条がそれ
に大人しく従うわけがなかったが。

「お前、何するつもりだよ」

「ん？ライエと戦うんだよ」

そして、学芸都市に返す。学芸都市に一度帰してしまえば、しばらく戻ってくることはないだろう。今学芸都市は唯一の超能力者が居なくなつてパニックを起こしているだろうし、その上『第二位』のライエまで居ないのはかなりの痛手のはずだ———というのが綾季の魂胆だ。上条は学芸都市云々の話は知らないだろうが、『追い返す』くらいなら了承してくれるだろう。

「…お前、戦いたくないって顔してるぞ」

綾季の肩が揺れた。

「そんな中途半端な気持ちでやったら、どうにもならねえだろ」

「大丈夫。絶対に」

綾季はにっと笑った。正直、勝つ自信がなかった。負ける自信こそ無かったが、無事では済まないだろうという気がしていた。何よりあっちは本気で、こっちは満足に力を振るえないのだから。——前に味わった絶望のために。

（そりゃあ、怪我とかしたくないよ。殺されたくないよ）

「しかも殺すとか言われてたろ。本当に殺されたりとかするかもしれない」

上条の言葉に、体中の力が抜けるかと思つた。が、耐える。

「死なないよ」

綾季は依然として笑みを浮かべている。作り笑いかは定かではないが、強気な目だった。

「ライエに綾季は殺せない。殺したくても殺せないの。それは法によってじゃなくて、戦力差によって。だからもし誰かが綾季を殺すことを許可しても、ライエは綾季を殺せない」

上条は大人しく聞いていた。けれどそれは、何も言うことが無いのではない。まるで子供の言い分を聞くようだった。

「だから綾季は大丈夫！ね、お願いだから逃げて。ていうか、逃げなって！」

「お前の言い分はわかった」

綾季の目が大きく開く。

「俺がやる」

「で、でもライエも能力者なんだよ！？しかも大能力——」

綾季は、先ほどの現象を思い出した。ライエの能力が、発動したのに何も起こらなかった『アレ』。上条は綾季の笑みに答えるように、笑ってみせた。

「俺ってな、学園都市第一位を倒したことがあるんだ」

「え、あ、一方通行、を？」

「そう。この右手で」

上条は右手をかざして、

「この右手は幻想殺し（イマジンブレイカー）って言って、異能

の力なら何でも消すことが出来る」

綾季はぱちくりと瞬きをした。幻想殺しがどうとかに驚いているのではない。

（もしかして、当麻が学園都市の絶対能力進化実験を止めたって
いう無能力者——！？）

上条は呆然とする綾季の頭をくしゃりと撫でた。

「戦いたくないなら戦わなくていい。代わりに俺がやってやるから。…もちろん、お前が望む範囲だけだな。あんまり傷つけたくないんだろ？」

綾季は小さく頷いた。

第二位の過去（後書き）

上条さんが男なターンですはい。

次は上条さんVSライエ…かな？

斥力操作（前書き）

綾季とライエは相対するキャラとして作りました。多分。そろそろキャラ設定…もう諦めようかしら…。

斥力操作

（まあぶっちゃけ、それ以外は打ち消せないんだよな。超能力で飛んできた瓦礫とか）

上条の言葉を思い出しながら、綾季は狭い道路の真ん中に立っていた。それじゃだめだ、と綾季は思う。綾季はライエの能力を知っている。

（ライエの能力は『斥力操作』。多分周りの物体の斥力を操って物体を飛ばしてくる。それは当麻に打ち消せない—————！）

二人の立てた作戦はこうだ。

綾季が完全にサポートに徹し、上条がライエに直接攻撃をしかける。というシンプルなもの。シンプルではあるが恐らく一番安全に配慮した作戦だろう。

上条は綾季の前に立って、たまにこちらを振り返る。振り返って、笑いかける。

（最悪、綾季がライエに攻撃を仕掛けることもあるかもしれないでも—————）

当麻を信じる。と綾季は強く目を瞑って、頷いた。

ライエが向かってくるのが見えた。

土御門の携帯が震える。やみくもに綾季を探し回っていた土御門は足を止め、やや乱暴に携帯電話を引っ掴み、着信画面を見た。海原、とそこには表示されていた。

「海原か!？」

『土御門さん、見つけました。綾季さんです』

「どこだ!？」

『ええ、第7学区の———』

おおまかな住所を聞いた土御門は、「了解」と言って電話を切ろうとした。が。

『待ってください!それが、綾季さんと一緒に二人の人影が———』

「?誰だそりゃ」

一拍おいて、海原が息を吸う音が聞こえた。土御門は最悪の可能性——すなわち、綾季が追っ手に囲まれている図———を思い浮かべた。

『どちらも少年です———あの、そのうち一人がですね…』

海原が困ったように言葉を止める。土御門は「何だよ」と不機嫌そうに言った。時間が無い。

海原は観念したように言った。

『上条当麻が、一緒に居ます』

「……………は？」

土御門の中の『最悪』の底が一気に深くなる。

土御門は上条を知っていた。何しろ同じ高校で、同じ学年で、同じクラスで、同じ汚名を持っていたりして、同じ寮の隣人だったりして。

（あんの、一級フラグ建築士があああああ！！！！！！）

心の中で轟く絶叫。土御門は『最悪』の図を再び思い浮かべた。

それは、綾季と上条が一人の追っ手と遭遇して云々であった。それを助ければ当然「どういうことか説明してくれ」となるだろう。学芸都市がどうこうとかを説明したくはない。というか出来ない。そうなれば厄介だ。

「…そうか。で、もう一人は？」

土御門はまあそう簡単にはならないか、と自身を元気づけ、海原に情報の続きを聞く。

『もう一人は——金髪に青い目の少年ですね。見たところ外人っぽいですけど…もしかすると綾季さんの追っ手かも』

マジかよ。土御門は項垂れた。

（あのかみやんが綾季を敵に回してるわけはない。むしろ肩を持つだろうな。アイツはそれ故に不幸なんだよ。ってことは…）

あれ、大正解？土御門はあの『最悪』のビジョンを思い返して、再び項垂れた。

「行きたくねえ………」

「なんだ、まだお前居たの？」

「悪かったな」

ライエの蒼い目を見て、上条は戦慄した。綺麗なのに禍々しくて、恐ろしい。どこかで似たような見たことあるな、と上条は思った。

「何？万有引力を守ったりしちゃうのかよお前」

「まあ、間違っではないない」

「ふーん。そう」

ライエは最初こそつまらなさそうにしていたが、だんだんと楽しそうに舌を出した。

「どこまで持つかなあ、俺相手に」

唐突だった。石が上条に向けて飛んだのだ。上条は今までの経験で得た反射神経でそれを避けると、5mほど離れたライエの懐に向かって走った。

「向かってきちゃあ駄目だろ。お前俺の能力の意味わかってるか

「？」

上条がライエに体当たりを食らわせようとした10cm手前のところで、異変。ライエの舌打ちが聞こえ、途端触れてもいないのに、ライエの体が吹っ飛んだ。

「……いや、違う。と上条は思った。例えば、それは磁石のN極同士を近づける感触と似ている。

（反発？っていうのか？）

ライエがやったことだろう、と上条は思っていたのだが、2mほど離れたところに着地したライエは再び舌打ちをした。

「危ねえ…やっぱり大気の質量じゃこの程度か。つかさあ、なんだよお前。さっきのといい…お前の体には斥力ってもんがねえのか」

「は？」

「…まあいいや」

ライエがそう言って、取り出したのは3本の釘。上条が目を細めたとき、綾季の高い声が響く。

「気をつけて！」

綾季の声と一緒に、ライエの手から一本の釘が飛ぶ。投げたというには速すぎる速度だった。上条は小さく呻いて、体を反らす。その間、上条はライエがまた釘を飛ばそうとしているのが見えた。

投げているのではない。釘が本当に、飛んでいるのだ。

どうなっているんだか、考える暇はない。上条は「やべ」と小さく漏らした。

（この体勢じゃ、かわせない！！）

そう思ったのも束の間。ライエから放たれた釘が、キンッ！と金属的な音をたて地面に落ちた。ライエが不機嫌そうに眉をひそめる。上条はもう何が何だかわからない。上条は体勢を立て直し、

「なあ、竜守——」

綾季は釘に向けて指を指していた。上条が初めて見る、綾季の超能力。ライエは楽しそうに笑った。

「お前か」

「相変わらず釘使うんだね。変わってない」

「お前もまだそうやって指使うんだな、演算に」

二人の間で火花が散るのを、上条は呆然と見つめていた。綾季はそんな上条に、きつく言う。

「早く」

「！ああ」

ライエはくつくつと笑って、走ってくる上条を再び能力であしらう。

（またか！どうなってんだ、これ）

と上条が疑問を抱いた瞬間、ライエの口からタネが明かされる。

「斥力操作だよ、斥力操作」

「斥力操作？」

「引力の対義語って感じだな。物体の間に存在する反発する力。それを操作するんだ。：何故かお前の体と俺の体で演算するとエラーが出るけど、それなら大気と俺でやりゃあいい」

「大気…？」

「質量があれば、なんでもいい」

言葉と一緒に、ライエの手から釘が飛んだ。あれも同じ原理なのだろう。手と釘の間の斥力を大きくし、反発させて飛ばす、といったところか。

綾季が飛んだ釘をまた地面に落とす。それを見て、あれはどうなっているんだろう、と上条は思う。さっき聞けば良かった、とも思った。

「余所見か？」

上から声が聞こえて、慌てて視線を上にする。近くの民家の塀に上ったライエは、いつの間にやら釘を回収していたらしく、二本の釘をペンのように回しながら笑っていた。

余所見をする暇はないようだ。

斥力操作（後書き）

上条さん本体であれば幻想殺しって効く……んですよ？
その辺ちよつと予想で書いてもた…。

暴走（前書き）

一回はやってみたかったネタ。
今後出せるかわかんなかったのと思い切ってみました。
いつになったら一方通行はくるのか…。

暴走

(クソ、あたらねえ！)

さっきから右手で殴ってやろうとしているのだが、どうにもあたらない。殴りかかったら避けられて、釘を飛ばしてきて、それを綾季が地面に落とす、の繰り返し。

(どうする…)

綾季も同じ事を考えているようだ。いつでも能力を使えるように、人差し指を立てたままだ。

「さあどうする？正直お前じゃ、俺に触りすらできねえよ」

ライエは「まあ別にそれでもいいけど」と笑う。上条はそれに異常なまでの不快感を覚えたが、どうにか押さえ込む。

「いい加減に、関係の無い一般人に頼るのは止めたらどうだ？」

綾季が強く歯をかみ締めている。ぎりっという擬態語が似合うくらいだったが、それでも綾季がライエに能力を向けることはしない。ライエは興ざめたように溜息をついた。

「つまんねー。…じゃあ、もういちごっこは止めようか」

上条がその言葉に警戒した瞬間、ライエの体は地面に反発されて上条の懷に潜り込んだ。上条は思わず距離を取ろうと後ずさるが、ライエに手を取られてそれもかなわない。

「もっかい——」

だが、ライエが取った手はまたもや右手だった。ライエが発動させた斥力操作は、幻想殺しによって打ち消されて、結果何も起こらない。上条は身をよじってライエの手を振りほどき、やっと後ろに下がった。

上条は幻想殺しが無かったらどうなってたんだろう、と思った。ライエは「何なんだよ」と不愉快指数を上げたようだ。

「あーもー…なんなの、お前。本当は殺さないつもりだったけど、殺してやりたくなってきた」

ライエは笑うことを止めた。ライエの目が月明かりで怪しく光る。上条は背筋が凍るのを感じた。

こいつは本当に、殺したがっている。冗談とか、そういう話じゃない。目が物語っていた。綾季もそれを感じ取って、叫ぶ。

「当麻！気をつけて！」

ライエはやはり笑わない。冷徹そのもので、今度は三本の釘を一気に飛ばしてきた。上条は一本よけ、綾季は一本を落とす。だが――

ぐちゃっ、という皮膚を貫く生々しい音がした。それは、上条の腕から発せられたものだ。

「――痛…っ！」

「当麻!!!」

上条の腕に血が伝う。ライエはそれでも笑わない。綾季は唇を噛んだ。引力を操作するためには、二つの物体の大まかな座標を割り出すことが必要になる。それは動いている物体にも言えることだ。動いていれば、座標を読むのは難しくなる。

上条は痛みで思わず息を荒げた。綾季は顔を真っ青にしながら、

「う、腕が…!」

「気にすんな、たかが釘だ」

たかが釘、とはいえ、傷は深いはずだ。あれだけのスピードで刺さったのだから、血管の2, 3箇所は傷ついていそうだ。むしろ、それ以上かもしれない。

綾季はがくがくと震える足を押さえられなかった。汗がどっと噴き出る。

（血、血、血が、血が出て。綾季のせいで、綾季のせいで、）

「竜守？」

腕の心配をすればいいのに、上条はあろうことかそんな綾季に声をかけた。綾季は体を抱いて、首を横に振る。

（当麻の腕が。私のせいで。あんな、あんな）

「おい！竜守！？俺の怪我は大したこと無いから———!!」

「ああ、あ、う、ああ、ああああああああああああああああ

あ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

自分のせいで他人が傷つくのは散々見てきた。見るのは嫌だが、もう慣れてしまったつもりだった。けれど。

（綾季がちゃんとしなから、当麻も——も怪我をした!!）

「竜守！竜守！？」

「あれ、壊れた？」

ライエは「まあ無理ねえか」と言っているが、上条には状況が飲み込めていなかった。よくよく考えたら上条は、綾季のことを何も知らない。

とりあえず、上条は綾季を落ち着かせることを先決にした。綾季の元へ行こうと、地面を蹴る。が。

「————っ!？」

動かない。足が地面に縫い付けられたように離れないのだ。頭上からは、電柱に張り巡らされた電線が引き千切られて落ちてくる。まるで重さが増えたかのように。

上条はやつと理解する。これが、綾季の能力。本質は少し違うが、間違っていないだろう。

「おいライエ!! お前、竜守に何があつたのか知ってるんだろ!!」

「言ってやる義理はねえな」

「このままじゃお前だって動けねえだろ!!」

「何言ってんのお前」

ライエは片足を軽く上げて見せた。

「引力が強くなったなら、斥力も同じ分だけ強くしてやりゃいい」

これはまずい、と上条は思う。綾季は能力を暴発(?)させているし、ライエは自分と違って身動きが取れる。袋叩きにされるのがオチだろう。

(くそ、竜守…)

「お前も壊してやろうか?…肉体的に」

「————っ!」

ライエには出し惜しみという一種の優しさが既にある。上条はどいうしたものかと頭をフル回転させるが、焦ってどうにもならない。

「さようなら、…名前知らねえや。とうま、とか言われてたか?」

上条は喉から何か出そうと思った。悲鳴でも、絶叫でも何でもいい。出ればよかったのだが、生憎ライエはそんな暇も与えずに、上条の腕に刺さった以外の二本の釘を弾いた。

ひゅん、と風を切るような音が聞こえたのは覚えている。

—————だが、その先は無かった。

暴走（後書き）

ここで補足↓綾季の能力は上条さん自体には効きませんが、衣服などにはもちろん効きます。上条さんが動けなくなったのはそのため。

：前回のライエは上条さんの幻想殺しに気づいていないのでまあ妥協。

無機質な少女（前書き）

…ぶっちゃけこの章暗いです。全部打ち終わったんですが、とにかく暗いです。

なんかもう…次の章からどうなっちゃおうやら…。

しかも今回の話個人的に気に入っておりません。出来が一番最悪。多分。

無機質な少女

カンッ!という間抜けな音が聞こえた。

「————え？」

ライエによって放たれた二本の釘は、互いと衝突して地面に落ちた。上条も、ライエも、拍子抜けしてしまう。

こんなことができるのは、この場に一人しか居ない。

「…竜守？」

少女は、無機質な表情を浮かべていた。顔には汗と涙の痕がうっすらと見えたが、表情は限りなく無に近い。

「————ライエ」

ライエは片眉をあげた。綾季が自我を取り戻したとは思えにくい。彼にはわかるが、能力の暴発はまだ治まっていないからだ。

「何してんの、万有引力」

「あの時、アナタは言ったよね」

上条は、直感した。

ライエが持つのが『斥力操作』。綾季が持つのが恐らく『引力操作』。

二つが重なったら、どうなるか？

導き出される答えは、『危機』。

それが誰のものかはわからないが、上条はそう思った。

「竜守————」

「勝負しようって、言ったよね。今やろう、それ」

上条の足は依然として動かない。上条は歯を噛み締める。

（駄目だ、何が駄目かはよくわからないけど！！！）

「————当麻」

「竜守、やめろ。俺がやるから」

「ごめんね。————綾季は当麻を傷つけた。だからせめて」

無機質だった。とにかく無機質だった。天真爛漫だった少女からは考えられない声。上条は二度目の背筋が凍るのを感じた。

「ライエ、いいよね？」

「まあいいけど」

綾季の顔がようやく、笑みを作る。その笑みもやはり上条の知る綾季と違った。

「竜守！！！」

上条は叫ぶが、届かない。上条は拳を握った。

（どうしたら――――）

「綾季！！かみゃん！！」

「え？」

声のした方を見れば、土御門が偉く焦った様子で走ってきていた。
上条はついつい、

「…何で土御門！！！？」

「そりゃこっちの台詞だ！！！！」

「――――土御門」

「またお前の知り合いか」

土御門は上条に走り寄ろうとしたが、その足は綾季の能力の暴走によって止められた。「うおっ」と小さく悲鳴を上げて、バランスを取る。

「綾季、これお前の」

「……………」

綾季が深呼吸をすると、上条と土御門の体が軽くなる。どうやらリラックスすることで、いくらか能力の暴発は小さくすることが出来るようだ。

「土御門。当麻をどこか遠くに」

「え？」

土御門と上条は共に呆けた。

「早く」

「ま、待て竜守——」
「早く——!!」

思わず怯む上条。綾季はそれを見もせずに、

「ありがとうね、当麻。：最初からこうしていればよかった。ほんっと綾季って馬鹿」

「そうしたら怪我しなくて済んだのに」と続ける綾季の声は、いつの間にかやんわりとしたものに戻っていた。なんとなく哀愁が漂っていていつもの綾季っぽくはなかったが、それでも人間味が増した。

土御門は「ふむ」と少し考えて、頷いた。

「かみやん。ちょっとここを離れるぜい」

「は!?!何言ってるんだお前!!」

「関係者以外立ち入り禁止だにゃー。安心しろ、綾季は助ける。：お兄様がな」

え?と首を傾げる上条を無視して、土御門は上条の手を引く。

「おい!土御門!!お前、急に出てきて何勝手に!!」

「いいから」

上条は「でも」と言ったが、次の言葉が出てこなかった。土御門は淡々と言った。

「これは本人の意思だ。それにお前が聞いたかはわからないが、アイツは超能力者だ。きっと大丈夫」

「そんなのわかんねえだろ!!」

「じゃあお前は、あの金髪碧眼に勝てるか？」

上条は答えられなかった。

綾季とライエが、どんどん小さくなっていく。

「やっとやる気になったのか？」

「ごめんね、待たせちゃった」

綾季は笑う。ライエも笑う。

———第一位と第二位は、ぶつかった。

無機質な少女（後書き）

一応上条さんと一方通行は顔を合わせたくなかったのですれ違い
：をテーマにしてたんですが、なんかもう無理矢理でこの話好きじ
やないです。

この章は色々課題を残すつもりで打ったんですが、課題をつくりす
ぎて薄っぺらい内容になってた……。この章の終盤にでも補足話付
け足そうかしら。

第一位と第二位（前書き）

こちらは一転変わって気に入ってたりします。ちょっと吃驚な点があつたりとかして。

書いて「ライエきたない」ってなりましたが（笑）

第一位と第二位

バチバチ！といつぞやの電気少女を思い出せる音が響いた。綾季が引き千切られて落ちてきた電線の電気を、筆り取ったボタンで集めているのだ。ボタンと手の間の引力が調整されているので、ボタンは綾季の手に収まることなく、電気を纏って浮遊する。

「電気使うの？意外だな」

『考えることを放棄した』に等しい綾季はライエの声に反応を示さない。強い光を放つ大きな目を、ただただ向けているだけだった。ライエは電気対策のために、二本の釘をいつでも避雷針に出来るように能力を使う準備をした。

綾季の能力は『引力操作』。対してライエは、『斥力操作』。レベルは違えど、引力と斥力は表裏一体と形容してもいい。引力は『引き合う力』で、斥力は『退け合う力』。同じような使い方も出来たりするし、その逆もまた然り。

「ライエ。…アナタは綾季に勝てないよ」

「すげえデジャヴで癪なんだけど。やってみなきゃわかんねえだろ」

「勝てないよ」

ライエは舌打ちをした。相変わらず話を聞かない。

「根拠は？」

「綾季は第一位で、アナタは第二位だから」

「…気にしてるんだからあんまり言うなよそういうこと」

「…初耳」

（誰も傷つけないっていうルートは無い。それなら）

ライエを傷つけるのは仕方が無い。

バリッ！と、ボタンから閃光が飛ぶ。ライエは避雷針となる釘を空に放って、電撃を回避した。隙について、綾季の後ろに回る。

「————」

何もしない綾季に少し躊躇したライエだったが、そのまま小さな背中を蹴り飛ばそうとした。

—————そこで、ライエに予想外のことが起きる。自分の体が、綾季にぐっと近づいた気がしたのだ。それは『幻覚』ではなく、綾季が二人の間の引力を強めたことによる『現実』だったが。

足が思ったより速く綾季の背中にあたる。綾季はその足が触れた瞬間に横に飛んだ。…無論、引力を強めたまま。結果、ライエの体もついていくように振り回される。

遠心力で思わず体勢を崩した瞬間を見計らい、今度は綾季は引力を元に戻した。ライエの体は道路に叩きつけられる—————はずだったが、ライエはそこで道路と自分の体の間の斥力を強めて衝撃を小さくしたので、手についてすぐに体勢を整えた。

「ライエ」

「っ！！」

耳に焼きつく、紙が破けるような音。それは案の定雷で、ライエのすぐ横に落ちた。

「…やっぱ第一位だな。雷制御の演算まだやってたのか」

「綾季だって成長するよ」

綾季が続け様に電撃を放つ。ライエは残っていたもう一本の釘をそこに置いて、後ずさった。釘は電撃を受けて、熱を持ったのか赤く染まった。

「防戦一方になってるよ、ライエ」

「っ！！！」

綾季は釘をどこかに吹き飛ばすと、ライエに歩み寄る。ライエによって石が飛んでくるが、それすら容赦無しに地面に叩き落した。

「どうする？ライエ」

「ざけんな」

だが、釘は無いし斥力による攻撃も利かない。ライエは砂を噛んでいるような気持ちに襲われた。飲み込もうと思えば飲み込めるのに、それができない。

綾季はゆらゆらとおぼつかない足取りでライエの元まで来ると、小さく拳を作った。殴ろうとも思っているのか。

「————」

しかし、拳がライエの体に触れることはなかった。それよりも。

綾季の猫のように大きな目から、雫が落ちる。

「…何泣いてるんだよ」

「泣いてない…よ」

泣いているだろう。ライエは虚勢を張る綾季を見て溜息をつくど、

「隙あり」

綾季の肘に触れるライエ。綾季がその真意に気づいたときにはもう遅い。

腕の中で、がりがりっという音が響いた気がした。途端に肘が焼け付くように熱くなる。この熱は何なんだろうと考えたとき、やっと綾季はこれは痛みだということに気づいた。関節が外れたのだ。綾季は呻くことすらままならず、息を荒げる。

「……………っ！」

「優しい奴はそれだから損をする」

ライエは笑っていた。綾季はその笑みに恐怖を抱いた。涙で霞んだ目を伏せて、後ずさるが、痛みで足がおぼつく。

「どうしたんだよ」

「あ、う」

綾季の足がもつれて、綾季の体はアスファルトの上に倒れた。ライエは倒れた綾季の前に立つ。

「優しいなあ、お前は…。見苦しくてしょうがないから殺すね」

どすつと綾季の腹にライエの蹴りが入る。綾季は流石に呻いた。腕の痛みと腹の痛みが、綾季の体力を大幅に削る。

ライエはそれから、何も言わずに綾季を蹴り続けた。綾季は痛みを抗おうにも、能力を使おうにも、間髪入れずに蹴りが襲ってくるのでどうにもならない。

（……………あ、やばいかも…）

綾季は思った。いっそ意識を手放してしまいたかった。戻ってくる思考の主導権。

……………綾季が人を傷つけないことはない。それならもう、自分が全ての傷を負おうと思った。

（死ねるかな）

腹を襲う痛み慣れてきて、朦朧とする意識の中、霞む目を何の気なしに開けてみる。すると。

「よオ、何俺達の保護物に傷つけちゃってくれてンですかア？」

深く澄んだ声に、ライエの手が止まる。声を出した『そいつ』は、白い髪に、赤い目。兎のような配色であるが、あどけなさの欠片もない。むしろ、狂気に歪んだ笑みを浮かべている。

綾季は、痛みに苛まれている中で呟いた。

「一方通行……」

第一位と第二位（後書き）

キーワードが出てきたりしてたんですが、それはあとでのお楽しみで。

一方通行出せたよわあああああいい！！！！！！

二人目の第二位と第二位（前書き）

うおー、一方さんマジチートすぎて戦闘シーンが一瞬で終わってしまうんですがー！！

てな訳で結構頑張った…んですけど、短い戦闘シーンです。

二人目の第一位と第二位

「一方通行…」

綾季の眩きに、ライエは目を細めた。

学園都市第一位の超能力者、一方通行は夜の闇から拒絶された白い闇を持ちながら、横たわる綾季を見る。

「オイオイ、ボロボロじゃねエか：やったのはオマエか？」

ライエに問う一方通行。ライエは鼻で小さく笑うと、「そうだよ」と答えた。今の彼の態度は、学園都市第一位を前にしても変わらない。

「チツ：オイ第一位」

綾季はぴくり、と体を動かす。一方通行は言った。

「三下に潰される気分はどォだ？」

「…っ」

「聞いたぜエ。絶対能力進化実験」

綾季は心の内で小さく謝りながら、体を起こして、一方通行の言葉を待つ。

「少し癪だが、オマエを助ける理由が出来た」

カチツという音とともに、一方通行は持っていた杖を放った。

能力を使わないと杖無しで歩けない一方通行が杖を放棄したということ、一方通行がデバイスを能力使用モードにした、ということになる。綾季はともかく、初めて会うライエにそんなことがわかるはずはない。ライエが瞬きをした瞬間に、一方通行はアスファルトを蹴った。

ライエが目を開けると、そこには一方通行が居た。

「は？」

完璧な不意打ちだった。ライエは後ろに下がろうとしたが、そこには綾季の体がある。

ライエが横に吹っ飛んだ。一方通行がライエを横なぎに叩いたのだ。もちろん一方通行の細腕では大きなダメージにはならないはずだが、一方通行の能力はベクトル操作である。

「————一方通行、何で」

「あア？土御門から電話着たんだよ」

「そう、じゃなくて…休みだったんじゃない」

「休日出勤だ」

一方通行の白い手が綾季の外れた関節の上に広がる皮膚に触れる。また腕の中でがりっと音がしたかと思うと、関節が元に戻っていた。痛みは消えている。

「あ、りがと」

「あんまり話さない方がいいんじゃない？腹、蹴られてたろ」

綾季は無気力になっていた腕を腹に押し付けてみた。途端に痛みが再び走る。これは酷い痣になっていそうだ、と綾季は思う。

ライエが咽ながら、塀に体重をかけながら立ち上がった。一方通行は「気絶してなかったンか」と小さく言うと、首を鳴らす。

「まアオマエはちょっと待ってろ。アイツ片して――」

「だ、駄目」

一方通行が「あん？」と不思議そうに言う。綾季は痛む腹を抱えながら、

「駄目。殺さないで。…あの子は紛いなりにも綾季の幼馴染だから。学芸都市に帰してあげたいの」

「…：わかんねエなア」

一方通行は面倒そうな声色で言った。

「そこまでされて、それでも助けたいってか」

「――だって」

綾季はか細くこそあったが、強い信念を持って。

「ライエは――綾季の大事な人だから」

ライエにとっての綾季はそうではないかもしれない。けれど、綾季は彼を失いたくなかった。それは全ての人が持つ慈悲とも言えるかもしれないし、あるいは別の理由からかもしれない。

（ライエは…）

自分を憎んだまま死んではいけない。綾季はもう一度息を吸って、
「お願い」

一方通行は二秒ほど綾季の目を見ていたが、やがて溜息をついて言った。

「……気絶で済ませてやる」

綾季は目を丸くした。一方通行がその顔を見て、不機嫌そうに口を尖らせる。

「何だよその顔」

「いや、だって」

残忍な人だと思ってたから、と言おうとしたが、止めた。

（よく考えたら、一方通行って優しい……よね）

「ううん、何でもない」

「あっそ」

「話は終わったか？」

二人の会話の間に、ライエは自分の足で立ち上がるまでになっていた。ライエは吐き捨てるように言った。

「お前……万有引力を保護してる暗部の」

「どオぞヨロシク。まア今日限りの付き合いだろオけどな」

「邪魔してんじゃねえよ、ヒーロー」

ライエの蒼い瞳が強く光った。途端に辺りに散らばっていた電線が飛び、うねる。微弱に残った電気を帯びているそれは、ぱちぱちと小さく音をたてた。先ほど引き千切られた切断面が皮膚に当たれば死には至らないかもしれないが、少なくとも感電はしてしまうだろう。

それでも、一方通行は屈しない。

蛇のような動きで一方通行に迫った電線は、彼の白い皮膚に当たったまさにその瞬間に——切断面からまだ電柱に繋がった部分まで——拉げた。

ぐしゃつと露骨な音が聞こえ、続いてぼとり、と電線『だったもの』がコンクリートに落ちる。ライエの目が見開かれた。

「…………お前、能力者か」

一方通行は依然として答えない。代わりに、黒く光る靴のつま先を軽くコンクリートに叩きつけた。ただそれだけだったはずだが。

ゴバツ！と、周りの塀が一瞬で破壊され、宙に舞う。瓦礫の大きさは大小様々だが、大きいものは30cmはありそうだ。ライエの開いていた瞳が驚愕の色に染まり、一気に焦燥へと変わる。

また、一方通行がつま先を叩きつける。すると、重力に従って落ちようとしていた瓦礫が地面に触れた瞬間に再び空中に飛んだ。もちろん、ライエに向けて。

当然そのまま瓦礫の下敷きになる大能力者ではない。ライエは舌

打ちと共に、能力を振るう。

瓦礫は空中で静止した。静止したまま——空中に浮かび続ける。ライエが斥力を調節しているからだろう。傍から見れば恐ろしい光景だ。

それでも一方通行は興味の無さそうに、じっとライエを見つめている。そして、

「くっだらねエ」

タンツと小さく、地面を蹴る音。

ライエが目を細めると、目の前に一方通行が居た。二度目の光景に、嫌な予感が脳裏を掠める。

「————!？」

大量に瓦礫が浮かんでいる空間を、一瞬で潜り抜けるなど人間の成せる技ではない。————人間には。

見れば、瓦礫は全てコンクリートに落ちていた。この一瞬で、一方通行はこれを行ったのである。

ライエは、彼が学園都市第一位の怪物だということを知らない。

「…ッ！」

「さアて」

ひゅつと、ライエが息を吸う音と、風を切る音が重なる。

「寝ンねしやがれ、クソツタレが」

二人目の第一位と第二位（後書き）

この章終わったら大分更新ペース遅くなるかと…！
あと二話分かと思われます多分。確か。↑不確か

ライエ再出演なるか…！

過去（前書き）

ちよつと脱線してる話。綾季の過去話です。
書いてて楽しかった私は多分S。

過去

「うわ、すごい」

「綾季ちゃん的能力を測る機器がようやく完成したんだ。早速測ってみよう」

そう言って連れてこられたのは野球場のようなところだった。野球場との違いは、そこに巨大な機械と巨大な鉄球があることだけだ。

その機械は全長10mはあるかと思われた。ウィーンという音は恐らく起動音。7本の細いコードが機械の端に接続されており、脳波の様子などが見られるようにだろうか、大小様々なモニターがある。その周りでは50人ほどの研究員が世話しなく動いていた。

「綾季ちゃん的能力はかなり高レベルだよ。あんなに強い能力は見たことがない。超能力者かもしれないね」

幼い綾季の手をとって言う茶髪に緑眼の男は、「まあ訓練もなしにそれはないか」と笑っている。綾季は男の顔を見上げて、頬を膨らませた。大方、そんなことないかもよ、と言った感じで。

この男は綾季の父から綾季を預かり、能力開発を行ってくれた男だ。もちろんそれだけではなく、綾季の足りない親からの愛情を注いでくれた人でもあった。綾季はこの男が大好きだった。

やがて機械の用意が出来たのか、若くて整った顔立ちの女性が綾季の名前を呼んだ。英語慣れしすぎてかなり訛っていたが、綾季は大きく返事をして男の元から駆け出す。男はそれを微笑ましく思い

ながら見送った。

綾季の右手、左手、右足、左足、うなじに一つずつ、頭に二つの電極が貼りつけられる。綾季はくすぐったいのか、うずうずともどかしそうにしている。

研究員の指示が飛んだ。

「綾季、鉄球を——」

「はいはい」

綾季は息を吸って大きな目を瞼で覆うと、体に軽く力を込めた。そして、目を開けた瞬間に——

ビーツと、鼓膜を揺さぶる音。そして、悲鳴に似た英語。

「大変です！！処理が追いつきません！！」

「演算量がこの機器を上回っていて……！！」

「熱処理が出来ません！！このままではショートします！！」

綾季は状況が理解できないでいた。この頃の綾季は幼いが故に電子機器などの知識が皆無だったのだ。演算を中止しようと思ったが、先ほど綾季をここに連れてきた男が遠巻きに首を横に振るので続行する。浮かせていた鉄球は、ぐらついてバランスを戻す、というのを繰り返した。

バチッ！と機器の何処かで音が鳴った。それだけならまだいい。

悲鳴に似た何かではなく、悲鳴が響いたのだ。綾季は肩を震わせた。

(どうしよう、どうしよう)

綾季はやはり男の顔を見る。演算を中止する権限は綾季には無い。代わりに男にあるのだ。何故か、と聞かれれば、綾季は彼に従って失敗したことは今まで無い。逆に自分で行動すると、失敗ばかりだ。綾季はいつの間にか失敗を恐れた。彼の指示が無いと、何も出来ないのだ。

それは大人からしてみれば、かなり情けないことだろう。だが綾季は、自分の無力さをまだ知らない。

綾季は男の顔を見て、心臓が止まりかけるのを感じた。

男は、笑っていた。

また悲鳴。そして悲鳴。喚く声が綾季の耳に届くたび、目頭が熱くなる。それが恐怖だと気づけば良かったが、綾季は無力なのだ。自分で考えることを放棄しているのだ。

そしてついに、爆音が轟いた。もくもくと黒煙が昇り、炎が地面と人を焼いていく。爆風と爆音は悲鳴すらを掻き消して、残った研究員たちの危機感ばかりを増やしていった。綾季も例外ではなく、綾季は体中が縄で締め付けられるような不快感を覚えた。

それでも男は笑う。

綾季は思う。

（機械が燃えて、爆発して、人がたくさん……え？）

これは、何によって引き起こされた？

考えることを放棄した綾季が、今度は演算を放棄した。というかそれは、物を掴む手の力が緩むような感触に似ていた。ズドン！と5mほど浮かんでいた鉄球が地面に落ちる。綾季のその行動に、男はやっと笑みを崩した。普通なら怯むくらいの大きな音だったが、綾季はそれどころではなかった。

演算を放棄した綾季が、代わりに考えることを始めた。また他の音が爆音によって爆ぜた。——もしかしたら、他の音なんて無かったから、そう感じたのかもしれない。

目頭が焼けていく。

「うあ、ああ、あ」

燃える機器を中心に、横たわってぴくりとも動かず、ところどころが焦げた人の体が炎の海の中で浮かんでいた。一つではない。総勢、五十人ほどだろうか。

綾季の不十分な理解力でも、その光景は十分すぎた。

「あああああああああああああ！！！！！！！！！！」

絶叫。炎から発せられた熱で、綾季の体が熱を孕んでゆく。このままでは燃え広がった炎が綾季を飲み込み、研究員たちと同じようなことになるだろう。遠巻きに見ていた男がそれを危惧して走ってくる。

「綾季ちゃん！！」

「あ、ああ、」

男にしがみついた綾季は、相変わらず呻き声をあげている。男は辺りを見渡すと、笑みを作った。

綾季は、この危機的状況の中で自分の無事を喜んでいるのだろうと思った。何だかんだ言って、綾季を大切にしてくれたのは他ならぬこの男だ。

だが、男は綾季の予想とは違うことを言った。

「超能力者だ」

綾季の涙に濡れた目が、驚愕に染まる。男はお構い無しに、指差した。そこには唯一生きたモニターがある。綾季は霞む目で、それを凝視した。

『LEVEL-5』

そう、モニターには映っていた。

男の笑みは、綾季が超能力者であることを喜んでの笑みだったのだ。

確かに喜ばしいことかもしれない。けれども綾季には理解できなかった。

（この人たちを見て、何も思わないの？）

「さあ、超能力者が焼けてはいけない。戻ろう」
「あ」

男は満足そうに言い、綾季の手を取った。

（この人の優しさは、綾季に向けてのものじゃない）

綾季は確信した。

（この人は綾季に死んで欲しくないんじゃない、超能力者に死んで欲しくないんだ）

やっと生まれた超能力者。その価値は高い。優しかった彼がこれからどうなるか見当もつかない。

（どうしたらいい？）

そして始まる自問自答。

過去（後書き）

キーワードは『考えることを放棄する』のつもりだったんですが…
これからもこの表現がたまに出てくるかと思われます。

償い（前書き）

二章エンドマークです！

これから書きたい展開とかキャラクターとか多かったなので色々疑問点を残したのですがどうでしょう？

償い

一方通行が取った行動は簡単だ。拳をつくり、ライエの腹に突き刺したのである。

当然ライエの体は弓のように曲がり、吹っ飛ぶ。飛んだ距離は目測で9〜10mといったところか。流石にライエが起き上がることはない。綾季は一方通行のベクトル操作の恐ろしさを再び目の当たりにし、息を飲んだ。

「……フン」

かちり、と一方通行は杖を取ってチャーカーのスイッチを切った。そして、補足するように言う。

「安心しろ、死んでねェ」

「う、うん」

後は『下』がやんだろ、と一方通行は言ったが、綾季はそれどころではない。

先ほど頭を駆け巡った、『絶望』。

自問自答で得られた答えは、それが『絶望』だったということ。綾季はこの苦々しい思い出を封印して、それでも忘れられなくて、男と『決別』した。———つもりだった。が。

（ライエが来たってことは、多分あの人が———）

綾季は嫌な予感を振り切るために、首を横に振る。

「一方通行」

「あン？」

綾季はオドオドと口を開いた。

「あの、その…綾季、行かなきゃいけないところがあるんだけど」
「…：何しに行くンだよ」

「綾季のせいで怪我した一般人さんに、謝りに」

一方通行は溜息をついた。変なところで律儀な奴、と思いながら。

「いいけどよオ、ソイツどこに居るか知ってンのか」

「土御門が連れていったから土御門ならわかると思うけど…」

あっそ、と一方通行は素っ気無く返した。綾季は瞬きをして、一方通行の言葉の意味がわからないといったように、キョトンとする。

「い、行ってもいいの？」

「逆に何で止めるンだよ」

「だって綾季迷子になったし！」

「俺が一緒に行くからいい」

綾季の表情が緊迫したものから満面の笑みに変わっていく。彼女の表情の変わりようは打ち止めと似ている。ガキはそんなモンなのか、と一方通行は思いながら、土御門をコールした。

「当麻」

寮の前まで来たとき、聞き覚えのあるソプラノに上条と土御門は振り返る。

「竜守…！」

「綾季」

そこに居たのは綾季だった。肩で息をしているところを見ると、走ってきたらしい。ついでに頬には涙の痕が見えた。

上条には、聞きたいことがたくさんあった。にも関わらず、かける言葉が見つからない。

「腕、大丈夫？」

戸惑う上条より先に、綾季が言った。上条は「あ、うん」と答えるが、その先が進まない。土御門は綾季の目を見ると、

「じゃ、俺は用事あるんで」

あ、待て、という上条の声は届かない。土御門はのん気に両手を頭の後ろに回しながら歩いて行ってしまう。

気まずい。綾季は上条の心情を受け取ったのか否か、上条が言いたかったことを代弁した。

「あれからどうなったか、気になる？」

上条は俯いた。綾季は小さく笑うと、

「ライエはちゃんと、学芸都市に帰したよ」

「ほ、本当か!？」

「うん」

上条はほっと安堵した。良かった。見たところ綾季も無事そうだし、一件落着だ、と思った。

だが綾季は、上条の思ってもみなかったことを口にする。

「ごめんね」

「え？」

「最初から、当麻に頼むんじゃなかった」

綾季の目の色は、憤怒に染め上げられていた。上条はどうして怒っているのかわからなかった。まず、彼女の怒りが誰に向けられたもののかわからない。上条にも見えるし、ライエにも見えるし、綾季にすら見える。

「そしたら、当麻は怪我しなくて済んだ!! 綾季は強いのに、ライエなんか一瞬で殺せるくらい強いのに!! 何で、何で!!」

「おい、竜守!？」

上条が綾季に駆け寄る。綾季は上条が伸ばしてきた腕を叩いた。

「優しい奴はそれだから損をするって、知ってるのに!!!」

綾季はそれだけ言うと、ごめんと小さく謝った。結局、怒りが誰

に向けられたものかわからない。上条は呆然としていた。

後ろ——土御門が去った方から綾季の名前を呼ぶ声が聞こえる。この通りは電灯が少ないので、はつきりと姿は確認できない。だが、上条はどこかで聞いたことがあるような気がした。

綾季は声のもとへ走る。上条は追おうか迷ったが、止めた。

自分は、彼女に嫌われたかもしれない、と思ったから。

――本当は、そうではないのだけれど。

あの怒号は、綾季に向けられたものであり、彼女の精一杯の償いだったのだけだ。

✱ ✱

一週間後。

「俺だ。出来るだけ早く手続き済ませろ。あ？何の？アホか、出国手続きだよ。あと入国のもな。謹慎なんかどうでもいい。いいから早くしろ。二週間？何でそんなに時間かかるんだよ。せめて一週間でやれよ。というかもう明日にでも学芸都市から出たいんだけど。：そうそう、それでいい。んで今度は学園都市の『上』にも連絡しろ。手助けは多い方がいい。癪だけど。：だから何で手間がちよつと増えただけで時間かかるんだよ！！一週間だ、いいな？何のため

ってお前、万有引力をぶっ殺し：じゃなくて、連れ戻すんだよ！！
殺してでも！！というかも殺す！！：俺の研究員たちの中の株が
下がってんの、わかる？もう失敗できないわけ。オツケー？：あ？
なら何もしないのいいってか？まあそれは正論だけだよ：それじ
ゃ俺の気が済まないの！！：だあかあ！！お前は俺に従えばい
いんだよ！！ぐちゃぐちゃ言ってるよと殺すぞ！！んじゃ！ヨロシク
！！」

少年、ライエは忌々しく舌打ちをして、電話を切る。病院のベッ
ドに寝かされてはいるが、怪我は大したことはない。

彼は一方通行の拳を受け——最後の最後で能力を駆使し、ダ
メージを抑えたのだ。

ライエは溜息と、言葉を一つ。

「次は絶対に殺してやる」

償い（後書き）

…今更キャラ紹介はありでしょうか…（

何だかんだ言って駄文は書きやすいのでサクサク書けます。何コレ複雑。

オリキャラまとめ

今更ですすいません。でもやりたかったんだ……！！

オリキャラ設定だと今更すぎるのでまとめにしてみましたがぶつちやけ設定です。

ぐだぐだ設定でも語ろうかと思います。

オリキャラ主人公、竜守綾季について。

テーマは無機と有機なんですが、なってますかね？通常は有機、暴走バージョンは無機のつもりなんですが……。

万年半袖短パンポニーテールという小学生よろしくな格好。身長も目測150センチ、実際148センチです。14にしては小さすぎやしませんか、という質問があっても、全力で「牛乳が嫌いなんです」と答えます。牛乳嫌いという設定があるんですが、本作で出てくるのだろうか。

能力についてですが、引力操作（読み方はグラビティオペレート）の超能力者です。『万有引力』というのは御坂という『超電磁砲』と同じ様なものです。呼び名って言うんですかね。

引力を操作するものなんです、なんでも私の知識が未熟なせいで残念なことになってます。駄文です。「これはこういうもんなんだ、うん」と思いながら読めば読めないこともあります。多分。

一応イメージではこんな感じですよ。肩まで……申し訳ない……全身描く余裕がありませんでした。

>i15596—2161<

敵役(?)、ライエについて。

テーマは我侭。見苦しい我侭ですね。書いてて「やりすぎだお前」となります。いつか一方通行さん辺りが説教するんじゃないかとすら思っています。

服装の表記が無いことに今更気づいたので一応言っておきますが、：厨二です(笑)。説明しにくい。半袖のジャージみたいなやつ：でいいのかな?(知らん

あ、年齢も書いてませんでした。綾季の二個上。年下に負けてる年上っていいと思います。関係ないですすいません。

能力は斥力操作。綾季の真逆キャラとして考えたので安易な発想ですが。んでもって大能力者。きつと読んだ方は「こいつ綾季とあんまり差なくね」と思ったでしょうが、それはこれから詳しく出る：んじゃないですかね：。

イメージ再び。金髪碧眼がフレンダと被った件。

>i15597—2161<

現時点ではこんな感じでしょうか。

何コレ楽しいですね！オリキャラについて今度延々と語ったりするかもしれませんがお付き合いしてくれると嬉しいです。もちろん読み飛ばしも可。

さて次の章は黙々と書き始めているところです。二章より書きにくいです。うおおおお、誰か文才プリーズ…！

オリキャラはこれ以上出るんだろうか…出ても1人か2人…かなあ
(ネタバレ)

噂のサイト様で作ってみたもの←

>i15595—2161<

アイテム（前書き）

お待たせしました。新章開始ですいいい！！

アイテム出したかったのです…！浜面とか考えてたはずなのに気づいたらカットしてました。ごめんね浜面…大好きだよ…。（

そのお陰で時間軸がさっぱりよくわからんことになりました。あれー？あれー？

まあこれはこれでいいんじゃないか、といった感じで許してつかあさい。パラレルワールドとかっていう認識で。↑

…やっぱり優柔不断になってきてますね、私。

アイテム

『斥力操作の大能力者は作戦を逸脱した行為に及び失敗——』
「ほんっと、馬鹿は救われないねえ」

なあ、そう思わない？と男は言うが、電話越しの声は彼のノリがよくわからず、「ああ、はい……」と当たり障りの無い返事を返す。

何日も手入れされていないであろうぼさぼさの茶髪に、歳に見合わぬ好奇心に溢れた緑の瞳を持つ男。その男が居るのは学芸都市のホテルの一室だった。中々上流階級の人々が使用するホテルで、部屋中に美しい装飾が施されているというのに、真っ暗なせいで何も見えない。吊るされたシャンデリアの面目も丸潰れである。それでも男は闇で覆われていないと落ち着かないとでもいうように、いかにもリラックスしたような調子で続けた。

「ライエは何であんなに綾季ちゃんを嫌ってるのかなあ。いい子だと思っただけだ」

『————どうしますか？』

電話越しの声は男のぼやきに答えることはしなかった。男は口を尖らせながら、

「んー…学芸都市にはもう綾季に対抗できる能力者居ないしなあ。かと言って傭兵だとかスナイパーとか雇っても綾季相手じゃ分が悪いだろうしー」

『…では、どうするのです』

電話越しの声は若干苛立ちを孕んでいた。男はそれに気づかない

まま、「察しろよう」と溜息混じりに言う。

このよくわからないノリの男が『超能力者を生み出した』とは考えられない。と、電話越しの声は思っただろう。それでも、事実は事実。彼こそが、『竜守綾季』の能力開発を担当した張本人。

「次はー：学園都市に手伝ってもらおうよ」

名を、レイヤ・ウィヴァル。

綾季を自身の『考えること』を放棄させるまでに執着させた、『失敗』を知らない男。

『アイテム』という組織がある。

このアイテムは一方通行達が所属するグループと同じ学園都市の『裏』を暗躍する暗部であり、七人しか居ない超能力者の一人が組織をまとめるリーダーとして君臨していた。

で、そのアイテムというのが。

「あー、シャケ弁うまー」

リーダー、麦野沈利。

「南南東から信号がきてる：」

構成員、滝壺理后。

「結局さ、きた指令って何なの？」

同じく、フレンダ。

「どうせ超面倒な指令です。私ら暗部をパシリとでも思ってるんですよ、『上』は」

同じく、絹旗最愛。

ファミレスの一角に陣取っている彼女たちこそが、アイテム。学園都市の『表』を陰ながら支える少女たち。機密レベル的にはグループと同程度のはずだが、どうにもそう見えない。一見仲の良い4人組にも見えるが、中には奇人変人ばかりが詰まっていたりする。

その内の一人、艶のある茶髪に、大人びたスタイルを持つ麦野は、コンビニで買ったシャケ弁をつつきながらフレンダの質問に答えた。

「んー？学芸都市云々って言ってたけど」

その言葉に、ウェーブのかかった金髪に青い目のフレンダと、12歳ほどでニットワンピースを纏った絹旗が揃って首を傾げる。一つの単語が引っかかったのだ。

「学芸都市い？」

「超気になりますねそれは」

普段聞かない単語である。知識こそあるが、詳細を詳しく知ってはいない。知っているのはアメリカにあって、学園都市を真似て造られた——ということくらいだろうか。

興味を抱いた二人とは対称的に、ピンクのジャージを着た滝壺はどこ吹く風でぼーっと天井を見つめていた。毎度のことなので3人は口出ししないが、傍から見れば「大丈夫なのこの子？生きてる？」といった感じだろう。

「なーんかねー、学芸都市から学園都市に逃げてきた能力者が居るんだって。そいつをひっ捕らえて学芸都市に返す仕事」

「ふーん：逃げてきたってことは学園都市が超羨ましくなったんですかね」

「結局人探しのね：楽しみにして損した。サバ缶サバ缶」

フレンドは残念そうにそう言うと、自分の前にある3つのサバ缶のうち1つを取って、どこからともなく現れたリモコンのボタンをぽちっと押した。途端にサバ缶の蓋はパンツと音をたて、開封された。簡単にいうと、爆弾が蓋を焼き切ったのだ。フレンドは爆発物の扱いに手馴れているので誤爆することはないが、爆弾を使用するくらいなら缶切りを使えばいいのに、と周りの人間は思うし、そもそもここはファミレスなのだし、わざわざ外から食品を持ち込むのはどうなのだ、とも思う。麦野のシャケ弁だってそうだ。だが他のメンバーはいつものことなので口出ししない。

「でもやらない訳にはいきませんしね。はあ：超見たい映画があったのに」

「全員でやらなきゃ駄目っばいよ」

「えー？何でさ麦野」

麦野は口に含んでいたシャケと米を噛み砕いて飲み込むと、

「その能力者、超能力者らしいよ」

絹旗はぼかんと口を開け、フレンダは思わずサバ缶を持っている手を滑らせそうになった。磯のかほりの詰まったそれを落としていたら、そんな惨事になっていただろう。それでも麦野はその光景をまるで無視して、再びシャケ弁に箸を突っ込んだ。

絹旗とフレンダの二人はしばらく呆けていたが、流石に叫ぶ。

「な、何ですかそれ！！？超吃驚です！！」

「何なのその余裕！！？それが同じ超能力者の余裕って訳！？」
「へー…」

滝壺の声はのん気なものだったが、二つの叫び声に周りは迷惑そうな視線を向ける。それどころではない二人は気づかない。麦野は二人の剣幕に溜息をついた。確かに超能力者が化け物だと身を持って知っているのに、この依頼に吃驚しない奴は居ないだろう――
――あの一戦もあったし、と麦野は思う。

麦野は箸を置いて、堂々たるリーダーオーラを辺りに撒き散らしながら言った。

「安心しなつて！学芸都市の能力開発で生まれた超能力者なんてたかが知れてる。どうせ大能力者と大して変わらないよ」

フレンダと絹旗は互いの顔を見合わせた。確かに彼女が言うこと

が間違っているとは思えない。それに、こちらには超能力者も居るんだし――。

そう、麦野沈利。彼女こそがアイテムのリーダーであると共に、学園都市に七人しか存在しない超能力者の第四位。能力の正式名称は『粒機波形高速砲』という長くて覚えにくくてゴツく、少女が持つ能力にしては可愛げも無いが、その能力は強大である。現に、『原始崩し（メルトダウン）』という異名すらあるほどだ。

フレンダと絹旗は致し方ないというような感じで、

「…まあ、仕事は仕事ですし…」

「結局、やるけどさ…」

二人を領かせた麦野は満足そうにシャケ弁をつつくのに戻る。超能力者として好物くらいはあるだろうが、何故それがシャケ弁なのか。そんな疑問を持ちつつ二人は残る不安を無理やり拭い、大丈夫だと自身に言い聞かせた。

相変わらず滝壺は聞いているのか否かで、ひたすら宙の一点を見つめていた。…本当に暗部らしくない。

アイテム（後書き）

時間軸（笑）

そして新キャラですわーい。でも次出るのは恐らくこの章のラスト
辺りですごめんねー！！↑

予兆（前書き）

年内の更新はこれがラストになります。

果たして来年、更新できるんだろうか（受験的な意味で

予兆

月が照らす廃ビルの屋上に、四つの人影がある。実を言えば周りにも人は居るのだが、彼らは倒れたままだ肺を膨らませたりしぼませたりしめない。生きてはいるが、意識が無ければ骸同然だ。

元は意識があった彼らの『足止め』が務めだった一方通行は、首のチョーカー型デバイスに手を伸ばし、スイッチを切り替えた。海原がニコニコと笑みを貼りつけながら一方通行愛用(?)のトンファのような杖を渡す。

「ご苦労様です。一方通行さん」

「あア。で、そっちは」

「一方通行が雑魚を誘き出してくれたお陰でこの通り」

結標がパソコンに接続するUSBメモリをスカートのポケットから出す。USBメモリは月の光を反射させて光った。

「それが、『妹達の譲渡に関する文書』か。文書なのにわざわざUSBメモリにねエ」

「それだけ量が多いんだろうな。一万体のクローン人間の譲渡なんて簡単なものじゃないだろうし」

土御門はそう言ったが、一方通行は依然として不機嫌そうだ。彼は『妹達』の命を守るためにグループに所属しているようなものだから、『譲渡』がどうかという話を聞いて平然としていられる方がおかしい。しかも『譲渡』後は、無残にも再び実験動物として再利用されるのだから尚更だ。

一方通行は舌打ちをすると、杖をついてここから去ろうと歩き出す。他の三人もここに長居する理由が無いので、後に続く。

と、一方通行が階段に繋がる鉄扉に手をかけた瞬間。

ガチャッ！と音がして、勢いよく鉄扉が開いた。――外側に。

当然、一方通行は鉄扉との正面衝突を免れることが出来ず、痛々しい音をたててコンクリートでできた床を転がった。シリアスムードから一転、ドリフムードである。土御門は順応が早く、嘔き出した。

「にゃはははは！！！すっげえ今漫画見てるみたいだったにゃー！！」

「~~~~~ッ！！！！！」

床で尻餅をつき、言葉にならない悲鳴をあげながら頭を押さえる一方通行。結標が慌てて笑う土御門の横腹に鉄拳を突き刺す。やはりドリフムードである。というかもドリフである。

一方通行は怒りやら羞恥やらで顔を真っ赤にしながら、怒鳴った。

「誰だ扉開けやがった奴はア！！？」

「遅い！！！！」

一方通行と同じくらいの大音量で、扉を開けた張本人は叫んだ。彼女は猫のような大きな目を憤慨の色に染め上げながら、そこに仁王立ちしていた。服装は半袖短パン、髪は短いのに無理やりくく

れたような小さなポニーテール。

———そう。我らが竜守綾季である。

一方通行は「やっぱりオマエか」と同じく憤慨した。こちらは真つ当な理由である。綾季は本来、キャンピングカーで留守番——というわけだったのだが、女の子故に一人で居ることが好きではないらしい。綾季は先ほど起こったドリフよろしくな光景を見なかったのか、何も無かったように言った。

「遅い遅い遅い!!! どれだけ待ったと思ってるの!!!?」

「だアかアらア!!! ちょっと遅くなるかしんねエって言ったじやねエか!!!」

「うっさい!!! それより仕事って終わったの!!!? 終わったんなら早く帰ってきてよ!!! 綾季は30分一人で居ると死んじゃうんです~~~~~!!!」

「オマエなア!!! ちょっと前まで落ち込んでたのに何だ何だよ何ですかアそのテンションはア!!!?」

結標は思わず溜息をつき、海原は苦笑いを浮かべる。土御門はニヤニヤ笑いながらその光景を見ていたが、二人はそんな気持ち悪い視線に気づかないまま口論を続ける。

「大体オマエは保護物なんだからよオ!!! 大人しくしてろガキが!!!」

「物!? 綾季物扱い!!!? もう怒った、打ち止めに告げ口してやるから!!!」

「俺は間違ったこと言ってねエだろオが!!!」

「女の子の扱い方を間違ってるんです!!! ああもう!!! 早くとんかつりじちよーって人に会いたいのに!!!」

「だから、面会が許可されてねエンだっつの！！あと何だとか
つりじちょーって！！」

まさに売り言葉に買い言葉である。土御門は相変わらずにやけな
がら、思ったことを言った。言ってしまった。

「流石ご兄妹…ぷくくっ」

「土御門！！！！」

二人の研ぎたて熱々の怒りの矛先が土御門に向けられる。流石の
土御門もそれには「げ」と呻いた。何を隠そう、この二人は共に超
能力者。土御門が二人を相手に出来るわけがない。

二人はそれでも、容赦なく。

「さアて、土御門くん、愉オブコースでエす」

「人前に出しても恥ずかしくないオブジェにしてあげるね！」

なんという連携プレー。土御門だけでなく、結標と海原すら息を
飲んだ。

―――後に土御門は、本当にオブジェになりかけた。

「あー、死ぬとこだったぜい」

キャンピングカーに戻ってきて、土御門はグシャグシャになっ

た金髪を整えながら言った。結局、超能力者二人を前になす術が無かった土御門は、土下座をして「申し訳ございませんもう言いません私が悪かったです卑しい私をどうか許してくださいませ一方通行様綾季様」と噛まずに10回言えたら許すという半ば拷問に近い条件を飲み、どうにか成功させて今に至った。一方通行と綾季はしばらく不貞腐れていたが、約束だから仕方ない。

綾季はライエの件があり、しばらく落ち込んでいたのだが――一週間経った今、順調に、憎たらしいほど回復していた――ようにも見えるが、その無駄な元気は空元気であることをグループの四人は見抜いていた。あえて口には出さないが。

結標はぶすくれるダブル第一位とにゃーにゃー野郎を尻目に、キヤンピングカーの備品の一つのノートパソコンに、廃ビルから強奪してきたUSBメモリを接続した。ピッと電子的な音がして、画面が文字で埋め尽くされた。『妹達の譲渡に関する文書』である。まさにそれだった。――が。

「――――あれ？」

「どうしました？ 結標さん」

結標はかちやかちやとキーボードを少し叩いて、目を見開いた。

「これ――――文書じゃないものが」

「え」と結標以外の四人の一言が見事に重なる。一方通行は結標の膝の上に乗せられたノートパソコンを奪い、中央の机に自分に見えるように置く。

「……『竜守綾季の保護』オ？」

「え、綾季？」

綾季は名前を呼ばれたことに吃驚したように、呆けた声を出した。
土御門がすかさず、

「でも保護は俺たちが——」

「『保護した後は早急に学芸都市へ送還する』」

一方通行が読み上げたことで、キャンピングカー内に沈黙が流れる。互いが互いの顔を見合わせ続ける。

五人の中で何周かそれが続いて、やっと結標が口を開く。

「グループへの、指令：じゃないわよね」

「ないないない」

土御門がこれでもかと首を横に振る。同じく海原も。結標は腕と足を組み、「ふむ」と考えるようなポーズをとった。綾季が何となく、四人に距離をとっているような気がするが、それはこの際気にしない。

一方通行が、おもむろに言った。

「俺ら以外の誰かが、コイツを奪いに来ようとしてるってことじゃねエのか」

綾季が肩を揺らし、とっていた距離を一気に詰めた。そのまま一方通行の細い腕にくっつく。一方通行はうざったそうにそれを振りほどいた。相変わらず人の気持ちを考えない奴だ、と綾季は思う。
仕方が無いから隣で縮こまる。

土御門はしばらく宙の一点を見つめていたが、「あるかもな」と言った。綾季は一気に涙腺を緩ませ、

「どどどどど、どおしよおお!!」

「オイコラ、耳元で騒ぐンじゃねェ。あとどっかで聞いたことあるぞソレ」

「まだそうとは決まったわけじゃないでしょ。それに、どんな奴が襲ってきてもぶっ飛ばしてくれるわよ。一方通行が」

「俺かよ」

他に誰に居るんですか、と海原が言う。綾季さんの手助けをすることで妹達の命が助かるんですよ、とも言う。一方通行は正論ばかりを叩き込んでくるこの男に毎回苛立ちを覚えずにはいられない。相変わらず色々と長々と語る海原の言葉に、「あアハイハイ」という生返事を被せてやった。

「まあ、万が一ってこともあるだろうし。一方通行、ガンバ!!」
「他人事だなアオイ」

悪態について、綾季の潤んだ眼を見た一方通行は、溜息をついた。

予兆（後書き）

いやはや、やっぱりギャグターンは打ってて楽しいです。
…もはやライエが恋しい今日この頃。

良いお年を！

始動（前書き）

あけましておめでとうございます。お久しぶりです。

長らくお待たせしてすいませんでした…！！

今回どういう意味で打った話なのかよくわかりません（

始動

「えー！？また仕事お！！？」

綾季が一方通行にぎゃんぎゃんと吠えている。かなり耳によりしくないであろうが、一方通行は無視シカトを決め込んでいる。土御門、結標、海原の三人は、この頃常に見るようになったその光景を、微笑ましく思い始めていた。

今日の仕事は『暗部の殲滅』。暗部と言っても、機密レベル的にはグループより下で、人数も多い。『上』が邪魔だとも思っただろう。

『殲滅』とはいえ、あまり難しい指令ではない。特に最強の能力者、一方通行が出てしまえば一瞬で終わる。だから、『殲滅』関連の仕事は殆ど一方通行に押し付けられる。今回もまた。

「何で一方通行ばかり居なくなっちゃうのさ」

「仕方ないですよ。殲滅系の仕事は多いんですから」

綾季は海原の言葉にしばらく口を尖らせていたが、やがて思い付いたように手を叩いた。

「綾季も行く！！」

「」「却下」「」

四人が間髪入れずに答えた。綾季の頬が怒りでかあっと赤くなり、再び怒鳴り散らす。

「何で何で何で!!!?」

「邪魔になるからに決まってんだろオが!!!」

「んなー!!!? 綾季は超能力者なんだよ!!!? 絶対手伝いくらいできる!!!」

「そオいう問題じゃねエンだよ!!!」

ぎゃんぎゃんとダブルで吼え始める二人。土御門はぼそりと呟いた。

「何でそこまで一方通行と居たいのかにゃー...?」

「さあ…懐いているのは確かね」

揃って首を傾げる三人など気にもせず、超能力者二人組はまだ言い争いを続けている。

「一方通行よりは弱いけどさ!!! でもでも綾季だって手伝いくらいできるもん!!!」

「あんなア!!!」

やがて一方通行ははぁ、と大袈裟に溜息をついた。綾季はそれに少々傷ついたようで、何か言いたげにしているが何も言わない。

一方通行は綾季に言った。

「オマエが怪我したら困るじゃねエか…」

「ほえ?」

綾季は頭の中で何度か一方通行の言ったことを反復するが、どうにも意味を理解できない。一方通行は言い聞かせるように言い直した。

「俺はオマエに怪我されると困るンだっつウの」

ぼんっ！と小爆発が綾季の頭の中で起きたかと思われた。途端に耳やら頬やらが熱くなって、何が何だかわからなくなる。とりあえず、わかるのは――――

「オイ、オマエ顔赤いぞ」

「うへ！！？」

「まアいいや、だからここに居ろ。いいな？」

「うん、はい、ええ、いえす」

綾季は餌を食べる魚のように口をぱくぱくとさせ、真っ赤な状態のまま高速で頷いた。見ていた三人は思わず、

（（何コレフラグスタンドアープ！！）（））

一方通行は。

（怪我なンかされたら『上』にケチつけられンだろオが…お断りだぞそンなン）

綾季は。

（顔熱いいいい何今のおおお！！！！）

ここは機能していない研究所。埃だらけではあるが、人が潜んでいただけあって生活感がある。これからは誰も立ち入らないことを考えると、少々切なくなるだろうが、一方通行は微塵もそんなことを考えない。

がんと聞いていて耳を塞ぎたくなる音と悲鳴が響いてから、辺りは静寂に包まれた。一方通行は首を鳴らすついでに、チョーカーのスイッチを切り替えた。

「さて、と」

足元に倒れているのは紛れも無く人。ただし、前回のようには生きてはいない。この状況を作り出すことが一方通行の使命なのだから。現に、赤い湖が床一面に広がっており、誰も無事では済んでいないだろうということを想像させる。

（戻るか）

返り血すら反射して、赤く汚れていない白は、立てかけておいた杖を乱暴に引っ掴み、歩き出す。死体の処理は『下』の奴らがやるだろう、とか思いながら。

一方通行が今まで居た大小様々な機器があり、薬品の匂いが立ち込める部屋から廊下へ出たときだった。

「—————あれ？」

—————という声が聞こえた気がした。悪寒。暗い廊下のずつと奥から、聞こえたその声は明らかに肉声。

（何だァ：？）

長く続く廊下の奥を目を凝らして見る一方通行だったが、暗くて何も見えない。だが、気配くらいはわかる。

それは、悪魔のような気配。

一方通行は普通に、先ほど潰した暗部の残りの人間かと思った。殲滅を目的としている一方通行がそれを見逃すわけにはいかないし、元々居なかったのなら居ないでいい。一方通行は杖をついてそちらへ向かう。周りには赤い水を浴びた人体が転がっていて、鉄の匂いが鼻を衝く。

見えない人影は再び発声することはない。一方通行がかつん、かつんと音をたてているものだから、既に逃げてしまったかもしれない。一方通行は足を速めた。

だんだん目が闇に慣れてきた頃、長い廊下にも壁が来た。右は壁で、左は廊下が続いているが、最奥は出入口である。一方通行も最初、ここから入った。一方通行は左に曲がる。

（あれが残риだとしても、車でもねエ限り遠くには逃げられねエ。入ったときはそんな無かったし、まだ潜伏してる可能性が高エな）

出口のドアノブを、少し躊躇したあと回した。かちやりという音すらなく、ドアは簡単に開いた。簡易な造りになっているのだろう。吹き込む風で一方通行の白い髪がふわりと舞い上がる。そこはコンクリートで固められた駐車場だが、車は一つもない。人影すら無い。

（————空耳か？）

一方通行ははぁ、と溜息をつく。まあどっちにしろ出口はここしかないようだったし、無駄足でなかっただけマシだろう。一方通行は無駄を嫌っている。

と。

ドンッ！！と爆音が背後で轟いた。流石にこれは空耳ではない。一方通行が振り返ると、研究所の一角からもうもうと黒煙が舞い上がっていた。

（クソ、やられた！！）

恐らく暗部の残りは出口から出て、あの煙の出ている研究所の一室を潰したのだろう。そこに何があったのかは知らないが、他には知られたくないものでもあったのだろう。

一方通行は舌打ちをすると、普段より早く足を進めた。

「麦野、ありがとーね！全然奴ら気づかなかったわけよ！装置に爆弾仕掛けても誰も来ないし！」

「うーん…何だかなあ」

「どうしました？麦野。超納得いかなさそうな顔してます」

アイテムを乗せた車（運転しているのは即席で強奪したこの車の

運転手。カタカタと震えながらも麦野に従っている）は、第七学区の道路の脇に停車していた。車内で和気藹々とはしゃぐアイテムの面々。彼女たちの指令は複数あって、今日はそのうちのひとつ―――研究所の装置の破壊の任務を遂行したのだった。

麦野は腕を組んで、うーむと唸る。フレンダと絹旗はひたすら頭上にはてなを浮かべているが、滝壺はぼーっとして、会話に混ざらない。

「正直私、何もしてないんだよね」

「え？でも超人が居て…」

「何か、もう皆死んじゃってて…先に誰かがやっちゃったみたい
な感じ」

「…ふうん？でも結局任務成功万歳だったわけだし、この際い
いじゃない！ね！！」

麦野は「そーね」と言い、それから喋るのを止めた。フレンダと絹旗は映画やらサバ缶やらの会話をしていたが、それすら黙認した。

「あ、私超買物したいんで失礼しますね」

「おー」

絹旗が「んじゃ」と軽く手をあげ、車の戸を開けた。フレンダがじゃーうちらも解散しますかー、と言うので、今日のうちは解散と
いうことにした。

（誰か居た気がするんだけどな）

始動（後書き）

だから時間軸…もう俺これ気にしすぎじゃねえか。

もはやライエが恋しいです。（二回目）

何気に愛着があるらしいですね。

この万有引力終わったら万有引力？でも作…げふんげふん
？作ったら学芸都市が主かなあ。でもそうしたら禁書キャラ全然出
なくなるなあ…何妄想してんだ俺。

出会いと任務と（前書き）

長らくお待たせして申し訳ありません。

言い訳をさせてもらおうと受験勉強です…！うひー！

一応二月中旬頃には普通に投稿できると思うんですが、最悪三月まで延びるかもです。

今回はやっと章の真髓に一步近づいたという感じで。（何しかしこの章は前回と違って行き当たりばったりで打ってるので何が何だか。

出会いと任務と

「チツ…」

もうもうと黒い綿雲が昇っている。一方通行は煤けた崩れている壁を見て舌打ちを漏らした。

（クソ、スイッチ式か）

研究所の隣に敷かれたコンクリートに、タイヤが焦げたような跡があった。触ってみるとほんのりと熱い程度で、爆発させてから逃げたとは考えにくい。

（俺が来た後に来たのか：爆発させるくらいなら時間はかからねェだろォし）

気になるのはあの肉声だ。もしかすると他の組織が、一方通行の倒した暗部に気づかれないよう部屋を爆発させるのに侵入したのかもしれない。

（だとしたら、誰だ？）

一方その頃。

「結標結標ー！コレ可愛い！買ってー！」

「ちょっと…何でこんなに…」

「いいじゃん！どーせ『上』からお金わっさわっさなんでしょ！？」

「…もういいわよ。好きにきなさい」

「うわーい！！」

洋服店セブンスミストにて、綾季と結標の二人は衣服を買い漁っていた。…主に綾季のものを。

アメリカから手ぶらでやって来た彼女の着替えが無いことに気づいた（一応結標が同居人の服を借りてきてはいた）グループの面々が、やはり無いと不便という理由で買い与えることにしたのだ。綾季は女の子だし、下着やら何やらを選ぶのに付き添うのは結標が最適と判断され、今に至る。

それにしても綾季は欲望に忠実で、自分が欲しいと思ったものを全てカゴに放り込んでゆくものだから、店に入って20分だというのに既にカゴは自らのキャパシティを遥かに超える量の服でばんばんになっていった。

結標は溜息をつき、辺りを見回す。洒落た装飾がところどころに施された店内。中々広いので、一回綾季を見失っては見つけるのに苦労しそうだ。何より、脇に置いたカゴが果てしなく重量を増しているのは明らかだ。これを持ち上げながら綾季を探す事態は避けたい。

それよりも、店員の視線が痛い。金銭面は『上』から欲しいだけ頂けば問題ないとはいえ、流石に視線というのは掻い潜れないものだから性質が悪い。…本当は彼女の格好にも問題があったりするのだが、それに本人は気づいていない。

「全く：今頃一方通行は仕事だっというのに」
「何か言ったー？あ、コレもコレも」

何にも、と結標は半ば諦めたような口調で答えた。綾季は「それ？」と言って、再び服の品定めを始めた。

（この子狙われてるんでしょ：？早く帰りたいのに）

ウィーンという電子的な音が鳴った。大方客が帰ったか、来たかのどちらかだろう。結標は気にせず、ふああ、と大きく欠伸を漏らした。

（眠い：綾季の気が済んだら早く帰って寝たい：）

と、結標の眠気が一気に吹っ飛んだ。

「：綾季？」

居ない。先ほどまでそこで服を選んでいた少女が。結標の額に少量、汗が浮かぶ。嫌な予感。

慌てて服の行列の間を覗くが、綾季の姿は無い。

（……あれ、もしかして、もしかすると）

実際のスケールは小さいが、洋服店でこれほど絶望を覚えたのは初めてだ。

結標はこんもりと服が盛り付けられたカゴを見、溜息をついた。

何だか切ない。

（そろそろ新しいのが超欲しいんですよー…）

アイテムのメンバーと別れた絹旗は、一軒の洋服店に入った。――『セブンスミスト』という店だ。

店に入ると、まず店員の「いらっしやいませ」という声が耳に飛び込み、何やら床にばんばんになったカゴを置き、肌を存分に露出している女が目に入った。ミニスカートに、ブレザーを羽織っている。羽織った中は――サラシ。

（うわぁ…）

絹旗は怪訝そうにそれを眺めた。何だか怪しいし、退き返そうかとも考えたが、何も買わずに店を出るのは少々申し訳ない。

絹旗は至って普通を装い、その少女の横を通り過ぎた。

ゆっくり選ぼうと思っていたが、これでは何とも落ち着かない。絹旗は中々広い店内をぐるぐると見て回るが、先ほどの少女が気になっって仕方が無い。

（何というか、超何処かで見た気がするんですけど…）

誰だったか、と絹旗は首を傾げた。

そこで、どんっ！と、肩と腕に衝撃。とは言っても小さく体が揺らぐ程度のものであったが、絹旗の能力、無意識でも衝撃に対して発現する窒素装甲は機能する。この能力は力が強大なわりに展開できる範囲が小さく、手のひらほどしかなかったが、今回は最も衝撃の大きかった肩―――に機能した。それによって、絹旗が姿勢を崩すところが、逆にぶつかってきた『それ』が尻餅をついた。再びどんっ！と床を叩く音がする。

「ったあゝ…」

『それ』は小さなポニーテールを揺らして呻いた。洋服店ではあまり起こらない出来事故に、やっと事態に気づいた絹旗は慌てて、

「だ、大丈夫ですか!？」

「あ、うん」

絹旗が差し出した腕を掴んで起き上がった『それ』は、尻の埃を払って言った。

「アナタこそ大丈夫だった？」

「はい」

そっか、と笑うその少女は、思い出したように手を叩いた。

「ねえ、ブレザー羽織ってて、胸にサラシ巻いた女の子見なかった？綾季見失っちゃってさあ」

綾季というのがこの少女の名前なのだろうが、それ以上に絹旗は困惑する。

（あの超怪しい人の付き添いか何かですか…）

顔がそう物語っていたのだろう。綾季は手を振って、

「あ、いいよ。あの人格好がアレだもんね」

絹旗は気を使わせてしまったことに気づき、訂正する。

「いえ、超別にいいですよ。えーと、確かあっちに…」

絹旗が指差すと、綾季は背伸びしてそちらを確認した。

「ありがと！…っと、アナタ名前は？」

「絹旗です。絹旗最愛」

「最愛かあ…可愛い名前！」

綾季が無邪気に笑って言うので、ついつい頬が熱くなるのを感じた絹旗。

こんなのは久しぶりだ。すっかり身を闇になげうってしまった自分に、『可愛い』など。

「綾季ーっ！」と、先ほど指差した方から声が聞こえた。綾季は自分に指を指して、

「竜守綾季！んじゃまたね！」

アイテムの四人は、隠れ家の一つに集合していた。

「結局絹旗は何買った訳？」

「服ですよ。最近超欲しくて」

一見普通の女の子同士の会話だが、話しているのは普通の女の子ではない。爆弾を駆使する金髪少女と窒素を駆使するニットワンピース少女。いやにシニールだ。

麦野の手に握られていた携帯が震えた。四人はこれを待機してただけに、全員が何らかの反応を示す。麦野は電話を耳にあて、

「はいはい」

『ターゲットの情報ね。場所は第七学区…』

唐突に話し出す女声。グループもそうだが、学園都市の暗部には必ず指示を出す『電話の声』なるものが存在する。グループなら男声だが、アイテムのは女声だ。

女声は一通りのターゲットの場所をリーダーである麦野に伝えて、最後に。

「――了解。んじゃ」

麦野は電話を耳から離し、ボタンに指を這わせ操作する。それと一緒に、三人の構成員に今回の仕事の詳細を説明した。

「場所は第七学区の商店街の路地みたい。キャンピングカーら

しいからわからないけどね。作戦は任せるって」

三人は頷く。麦野は「あ、んでね」と忘れていたことをさらに補足した。

「ターゲットの名前は竜守綾季。髪をポニーテールにした14歳だって」

絹旗は一瞬、時間が止まったかと思われた。

今回の仕事は、『学芸都市の超能力者を捕らえ送還する』こと。

出会いと任務と（後書き）

次の更新はいつになるやら…。

待っていてくれると嬉しいです。受験頑張ろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1574p/>

とある少女の万有引力《アトラクター》

2011年1月29日15時11分発行